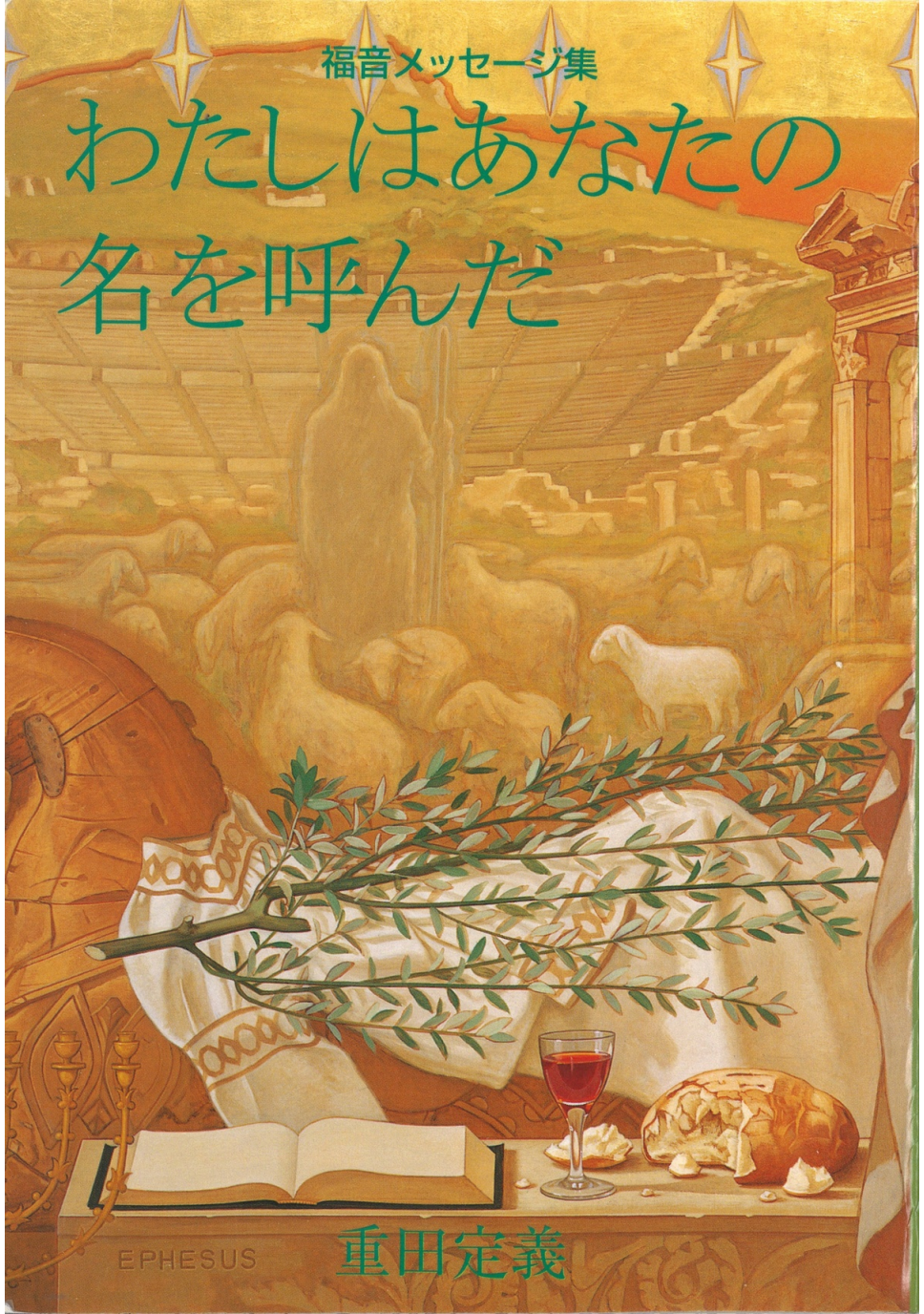
福音メッセージ集

わたしはあなたの名を呼んだ



重田定義

福音メッセージ集

わたしはあなたの名を呼んだ

重田定義

はじめに

このたび「わたしはあなたの名を呼んだ」と題する福音メッセージ集を出版することになりました。新しい世紀にはいって間もないこのときに、主からこの機会をお与えいただきましたことを感謝し、主の御名を心から賛美いたします。

昨年の九月十一日にニューヨークとワシントンで起こった同時多発テロは、まさに今世紀の今後を予知する出来事だったことは、それからますます激しくなっている世界の政治、経済、社会の大混乱によってうかがい知ることができます。そして、まさしく人類の歴史は聖書の預言どおり、世界の終末に向かって坂道を転がるように進み始めたということを聖書のメッセージによってはっきりと知ることができるのです。

このような混迷と不安に満ちた終末の時代の中にある私たちは、いったいどのように生きればよいのでありましょうか。この悩みに答えることのできる人は私たち人間の中にはだれひとりいません。ただおひとり、私たちを心から愛し、一人ひとりの名を呼んでご自

分のみもとに引き寄せようとしてくださる天地万物の創造主、生けるまことの神だけが私たちの悩みに答えてくださるお方であります。しかし、どうしたら私たちは神様のお答を知ることができるのでしょうか。

今回「わたしはあなたの名を呼んだ」と題する本に収めた十二篇のメッセージは、いずれも今の終わりの世に住む私たちが恐れることなく、いつまでも変わることのない希望と喜びと平安を持って生きるにはどうしたらよいのか、というきわめて重要な問題について、神様が聖書を通して私たちに語ってくださっているみことばを、私が各地のキリスト集会や家庭集会でわかりやすく語らせていただいたメッセージの中から選んで編集したものであります。どうかお読みになるお一人おひとりの心に、この本を通して神様が働いてくださり、まだイエス・キリストを信じておられない方も、またすでに信じておられる方も、この終末の世に生きる私たち一人ひとりに対するあわれみと愛に満ちた神様の深いみこころをぜひとも知っていただき、まことの幸せ、まことの喜びをご自分のものとしてくださるよう心からお祈りする次第です。

このたびの出版にあたり、すべてを導いてくださった私たちの造り主である神様にすべてのご栄光が帰されますように心からお祈りいたします。

なお今回の本の表紙には、画家の伊牟田経正兄が一九九六年第八二回光風会展に出品された油彩画「エペソ人への手紙」を用いさせていただきました。表紙装丁の労も取ってくださった伊牟田兄に心から感謝いたします。また、この本の出版について終始協力し、祈ってくれた妻都代子に感謝します。

二〇〇二年十二月

重田定義

目次

はじめに ……3
一 「わたしはあなたの名を呼んだ」……9
二 とりなしてくださるお方イエス・キリスト……24
三 神の近くにいることが幸せ……42
四 「九人はどこにいるのか」……58
五 神の杖……73
六 「眠りからさめるべき時刻がもう来ている」……89
七 「あなたがたの現状をよく考えよ」……105
八 神のみこころを行なうことの喜び……121
九 主の旗を掲げよう……138

十　世の終わりに臨んでいるキリスト者への教訓……153
十一　今必要とされている者はだれか……170
十二　隠された神の奥義……185

一　「わたしはあなたの名を呼んだ」

あなたを形造った方、主はこう仰せられる。「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。あなたが水の中を過ぎるときも、わたしはあなたとともにおり、川を渡るときも、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。わたしが、あなたの神、主、イスラエルの聖なる者、あなたの救い主であるからだ。

（イザヤ書43章1～3節）

今日は聖書のこの箇所から「あなたの名を呼ぶ方」はどなたかということについて、ごいっしょに考えてみたいと思います。

神が人間を造られた目的

ここに「あなたを形造った方、主」と書いてあります。これは天地万物の創造主なる神

様があなたもお造りになったということなのですが、ただあなたの肉体をお造りになっただけではありません。肉体を造られてから、その中に霊を入れてくださったのです。創世記には神様が天地、宇宙そしてすべての生き物をお造りになり、最後に人間を造られたことが書かれていますが、人間がそれらの生き物と決定的に異なる点は、人間にだけ神様が吹き込んでくださった霊があるということです。

神である主は、土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。

（創世記2章7節）

このように、神様はまず土地のちり、すなわち物質で人間のからだを造ってくださり、それからいのちの息をからだに吹き込まれたのです。このいのちの息が霊であります。なぜ神様は人間に霊を与えられたのでしょうか。それは神様と交わるためなのです。神様はご自分がお造りになった人間と親子のような親しい人格的な交わりをなさろうとご自分の霊を授けられたのです。神様との親しい交わりは霊を通してなされるものであり、そのために人間にも霊が必要であったのです。

ところがそのように造られた最初の人アダムとエバは神様の仰せに背いて自分の欲に従

い、神様との交わりを絶って身を隠したのであります。神様はご自分からそのように背き離れたアダムとエバに対してどうされたでしょうか。聖書には次のように書かれています。

そよ風の吹くころ、彼らは園を歩き回られる神である主の声を聞いた。それで人とその妻は、神である主の御顔を避けて園の木の間に身を隠した。神である主は、人に呼びかけ、彼に仰せられた。「あなたは、どこにいるのか。」

（創世記3章8～9節）

名を呼んでくださる神

ご自分を避けて身を隠したアダムとエバに向かって神様は「あなたはどこにいるのか」と呼びかけてくださっているのです。しかしこの呼びかけはアダムとエバだけにではありません。創造主である神様は、ご自分がお造りになったすべての人間を愛してくださり、ご自分と人格的な交わりをしようと、ご自分に背を向けている私たち人間一人ひとりの名を呼んでくださるのであります。しかも神様は私たちを母の胎内で形造ってくださったそのときから名を呼んでくださっているとイザヤは次のように言っています。

主は、生まれる前から私を召し、母の胎内にいる時から私の名を呼ばれた。

（イザヤ書49章1節）

聖書を見ますと、主なる神様はいろいろな人に名前で呼びかけておられます。アブラハムもモーセも神様から名前を呼ばれました。

神はアブラハムを試練に会わせられた。神は彼に、「アブラハムよ。」と呼びかけられると、彼は、「はい。ここにおります。」と答えた。

（創世記22章1節）

主は彼が横切って見に来るのをご覧になった。神は柴の中から彼を呼び、「モーセ、モーセ。」と仰せられた。彼は「はい。ここにおります。」と答えた。

（出エジプト記3章4節）

神様から名前を呼ばれたときに二人はどうしたでしょうか。すなおに「はい。ここにおります」と答えました。この応答から私たちは神様と彼らがほんとうに親しい交わりの関係にあったことを知ることができます。

名前は人格の象徴

名前というのは固有名詞であり、その人の人格の象徴です。かつて私は講義のときに学

生にときどき質問することがありました。ところが私は学生の名前を覚えるのが苦手で、質問するときには指でさして「君」と呼ぶことが多かったのです。しかし「君」と呼ばれるのと名前を呼ばれるのとでは、呼ばれる学生の心証はたいへん違います。名前を呼ばれれば、その学生は先生に自分が覚えられている、認められているという思いが起こり、名前を呼んでくれた教師に親近感を持つでしょう。もし、ほんとうに私がひとりの人格としての学生に関心を持っていれば、意識してその学生の名前を覚えたはずであります。そう考えると私は一人ひとりの学生の人格を尊重する心に欠けていた自分を反省せざるを得ません。

名前がその人の人格を象徴するものであるという、一つのエピソードをご紹介します。外国であった話です。ひとりの妊娠している女性がいました。その女性が産婦人科の医者におなかの子を堕してほしいと頼みました。いろいろな事情があったのだと思います。その医者は彼女に思い止どまるように説得しましたが、彼女はどうしても聞き入れません。医者は最後に彼女にこう言いました。「あなたのおなかにいる赤ちゃんが生まれたら、何と言う名前をつけますか」。それを聞いて彼女はうつむいてしばらく黙って考えていましたが、やがて顔を上げて「先生、私はこの子を生みます」とはっきり言いました。彼女の

心の中にどんな変化が起こったのでしょうか。おなかの子を堕したいと思っていたときには、その母親にとっておなかの子は人格のない細胞のかたまりに過ぎなかったのです。けれども医者にその子につける名前を聞かれたときに、母親にとってその子は細胞のかたまりではなく、ひとりの人格を持った人間となったのであります。名前をつけるということは、このようにひとりの人の人格を認める大切な意味を持っているのであります。

神様も私たち一人ひとりの人格を認めておられるからこそ、親しく名前を呼んでくださるのであります。そして、その神様が私たち人間に目に見える人格としてご自身を現わしてくださったのが、人となってこの世に来てくださったイエス様であります。イエス様は私たち人間と人格的な親しい交わりができるようにと私たちと同じ血と肉のからだを持ってこの地上に来てくださったのです。パウロはこれについて次のように言っています。

キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。

（ピリピ人への手紙2章6～8節）

イエス様は神様であるにもかかわらず、私たち人間と同じ肉体を持ってこの世においでになりましたが、それは私たちと同じレベルにまで降りて、私たちに目で見ることのできる神ご自身の人格を現わしてくださるためでありました。

名を呼んで救ってくださるイエス様

神の御子が人となられたイエス様も、私たちがイエス様に出会う前から私たちの名前をご存じで名前を呼んでくださいます。聖書にはこのような例がたくさんあります。イエス様がはじめてシモン・ペテロにお会いになったときに、次のように言われました。

彼はシモンをイエスのもとに連れて来た。イエスはシモンに目を留めて言われた。「あなたはヨハネの子シモンです。あなたをケパ（訳すとペテロ）と呼ぶことにします。」

（ヨハネの福音書1章42節）

キリスト者を迫害していた当時、サウロという名で呼ばれていたパウロは、キリスト者を迫害に行く途中の道でイエス様に名前を呼ばれました。

ところが、道を進んで行って、ダマスコの近くまで来たとき、突然、天からの光

が彼を巡り照らした。彼は地に倒れて、「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。」という声を聞いた。

（使徒の働き9章3～4節）

これが復活されたイエス様とパウロとの出会いでありました。

ザアカイもイエス様に名前を呼ばれたひとりです。

それからイエスは、エリコにはいって、町をお通りになった。ここには、ザアカイという人がいたが、彼は取税人のかしらで、金持ちであった。彼は、イエスがどんな方か見ようとしたが、背が低かったので、群衆のために見ることができなかった。それで、イエスを見るために、前方に走り出て、いちじく桑の木に登った。ちょうどイエスがそこを通り過ぎようとしておられたからである。イエスは、ちょうどそこに来られて、上を見上げて彼に言われた。「ザアカイ。急いで降りて来なさい。きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから。」ザアカイは、急いで降りて来て、そして大喜びでイエスを迎えた。これを見て、みなは、「あの方は罪人のところに行って客となられた。」と言ってつぶやいた。ところがザアカイは立って、主に言った。「主よ。ご覧ください。私の財産の半分を貧しい人たちに施します。ま

一 「わたしはあなたの名を呼んだ」

た、だれからでも、私がだまし取った物は、四倍にして返します。」イエスは、彼に言われた。「きょう、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから。人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。」

（ルカの福音書19章1～10節）

ザアカイはそれまで一度もイエス様に会ったことはありませんでした。ですからイエス様が自分の名前を知っておられるだろうなどとは思ってもいませんでした。そのイエス様に突然自分の名前を呼ばれたとき、彼はどんなに驚いたことでしょう。イエス様はザアカイの名をお呼びになって「今晩あなたの家に泊まる」と言われました。泊まるというのは、ほんとうに親しい交わりを意味します。彼はイエス様にそう言われただけでイエス様を自分の主と信じました。ザアカイは自分がどんなに罪深い人間であるかをよく知っていました。皆が自分を軽蔑し、自分を避けていることも知っていました。そしてイエス様の評判を聞いて一目だけでも見たいという思いで木に登っていたのです。ですからイエス様が罪深い、だれも相手にしてくれない自分のような人間を認めてくださったということが、名前を呼ばれたときにわかったのです。

これまでお話しした人たちと同様に、人はイエス様が何十億人の中から自分を名指しで

呼んでくださり、自分を滅びに至る罪から救い出すために十字架に架かって死んでくださったということを知ったときに、イエス様を自分の主と信ぜざるを得なくなるのです。イエス様はこう言っておられます。

まことに、まことに、あなたがたに告げます。羊の囲いに門からはいらないで、ほかの所を乗り越えて来る者は、盗人で強盗です。しかし、門からはいる者は、その羊の牧者です。門番は彼のために開き、羊はその声を聞き分けます。彼は自分の羊をその名で呼んで連れ出します。彼は、自分の羊をみな引き出すと、その先頭に立って行きます。すると羊は、彼の声を知っているので、彼について行きます。

（ヨハネの福音書10章1～4節）

牧者がイエス様で羊がイエス様を信じる一人ひとりであることは説明するまでもありません。なぜ羊はイエス様の声を知って、ついて行くのでしょうか。それは一匹一匹の羊の名前を覚えておられ、一匹一匹の名を呼んで「わたしについて来なさい」とおっしゃるイエス様を信頼しているからです。羊がイエス様を知っているとは、そういうことなのです。パウロは次のように言っています。

私は、自分の信じて来た方をよく知っており、また、その方は私のお任せしたも

のを、かの日のために守ってくださることができると確信しているからです。

（テモテへの手紙第二1章12節）

「私は自分の信じて来た方をよく知っている」ということは、「イエス様という方は、自分の罪のために身代わりに死んでくださったばかりか、今も日々名を呼んで守ってくださる方であることをよく知っている」ということであります。私たちも同じです。イエス様との人格的な交わりに入れられたときに、私たちはだれでも「私はイエス様をよく知っています」と確信をもって言うことができるのです。

私はかつて祈りをするときには形式的に「神様」という言葉から始めていました。祈りとはそのようにするものだと教会で教えられていたからです。けれども、形式的な祈りには神様との霊的な交わりが感じられません。長い間そのような状態が続きました。しかし吉祥寺キリスト集会に集うようになり、イエス様の十字架による贖いと復活による永遠のいのちのみわざがほんとうに個人的に私自身のためであったということがわかってからは、私自身を救うために人となって死んでよみがえってくださった方であるイエス様のお名前を自然にお呼びして祈るようになりました。それからは不思議にイエス様が身近かに感じられるようになったのです。私の名を「定義」と呼んで救い出してくださったイエス様に、

私も「イエス様」と呼んで祈るようになってから、イエス様と私の関係はほんとうに親しいものになったのです。

イエス様の名を呼んで祈る

私たちの名前は生まれたときに名づけられます。イエス様のお名前も御子なる神が私たち人間と同じ姿をとってくださって、聖霊によってマリヤからお生まれになったときに名づけられたものでありました。

イエス・キリストの誕生は次のようであった。その母マリヤはヨセフの妻と決まっていたが、ふたりがまだいっしょにならないうちに、聖霊によって身重になったことがわかった。夫のヨセフは正しい人であって、彼女をさらし者にはしたくなかったので、内密に去らせようと決めた。彼がこのことを思い巡らしていたとき、主の使いが夢に現われて言った。「ダビデの子ヨセフ。恐れないであなたの妻マリヤを迎えなさい。その胎に宿っているものは聖霊によるのです。マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。」

一　「わたしはあなたの名を呼んだ」

（マタイの福音書1章18～21節）

このイエス様に私たちが「イエス様」と心から御名を呼んで祈るときに、私たちの心はイエス様と結びついて、喜びに満たされます。しかし、悲しいことに喜びのないキリスト者も少なくありません。かつての私もそうでしたが、そのような方はまだイエス様との人格的な交わりを体験なさっていないのです。それではイエス様に信頼し、拠り頼むことができませんから、喜びも希望も平安もなくて当然でしょう。それでは自分の身の上に何かの問題、たとえば健康の問題、仕事の問題、家族の問題などが起こるとすぐに動揺し、自分の肉の力で対処しようとして焦ったり、苛立ったり、失望したりしてしまいます。このような状態でイエス様と霊的な出会いがないまま、ただ口先だけで「イエス様」とお名前をお呼びしても、心に喜びが起こらないのは仕方のないことです。

もし神様がたんなる観念的な存在であるならば、あるいは冷たい非人格的な存在であるならば、私たちはそのような神様を信じても、慰めも希望も励ましも与えられなくて当然です。けれども創造主なる神様は人となって私たちと交わってくださる人格を持った神様であります。その方が私たちの主イエス様です。聖書に、

主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。

（ローマ人への手紙10章13節）

とあるように、私たちがそのイエス様を信じたい、とすなおに心の戸を開いて祈り願うならば、イエス様はすぐに私たちと人格的に出会ってくださり、ひとたびイエス様に出会う体験をしてイエス様の愛を知った者は、もう決して離れることはないのです。

それはさきほど引用した聖書の箇所にある羊のように、イエス様に信頼して自分の名を呼んでくださるイエス様の声を聞き分けながら、また自分もイエス様のお名前を呼びながら従って行くのがいちばん幸せである、ということを頭ではなく体験的に知るからであります。私自身は相変わらず信仰が弱くて、試練に会うとついめげそうになってしまいがちな者ですけれども、そのときイエス様が私の名を呼んでくださり、冒頭のみことばどおり、

恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。あなたが水の中を過ぎるときも、わたしはあなたとともにおり、川を渡るときも、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。わたしが、あなたの神、主、イスラエルの聖なる者、あなたの救い主であるからだ。

（イザヤ書43章1～3節）

と励まし、支えてくださるので、また元気を取り戻すことができるのであります。

名を呼ばれた者は福音の使者

イエス様に名を呼ばれるということは、言いかえればイエス様から指名されることでもあります。何のために指名されるかと言えば、神様がイザヤやエレミヤを、またパウロやペテロをご自分の使者として指名されたように、イエス様も私たちをイエス様の福音の使者として世に遣わすためであります。特別な賜物を持ったキリスト者でなければイエス様を人に伝えることができないと考えておられる方が少なくありませんが、そうではありません。イエス様はすべての人の名前を呼んでおられます。そしてイエス様に名を呼ばれてイエス様のいのちによって罪を贖われた者は、ひとり残らずイエス様の証人として、福音の使者として、まだイエス様を知らない方々にイエス様を、その人にできる何らかの方法で紹介することを、イエス様が求めておられるのです。イエス様に救われた私たちはそのことを覚え、信仰の弱い私たちのためにいつも名を呼んで祈ってくださっているイエス様に、私たちも「イエス様」と御名をお呼びしつつ付き従って行けるように心から祈りたいと思います。

二　とりなしてくださるお方イエス・キリスト

罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしていてくださるのです。

（ローマ人への手紙8章34節）

まことの神とはどんな方か

私たちはまことの神様、すべてをお造りになった神様の存在について、いろいろなことを通して知ることができます。聖書のローマ人への手紙には次のように書かれています。

神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物（神様によって造られたもの）によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。

（ローマ人への手紙1章20節）

このみことばのとおり、自然を見て、これは人間が造ったなどと考える人はいないでしょう。心を謙虚にして自然界の山や海を見たときに、また数え切れぬほどの種類の植物や動物がその種類に従って自然の中に生きているのを見たときに、聖書を知らない人でも、このような美しい、あるいは壮大な、あるいは精緻な自然を造られた方がおられるに違いない、その方が神様だろうと思わずにはいられないのではないでしょうか。ですから、これらのものの造り主が神様ではないと言い切れる人はいないはずであると、ここで聖書は言っているのです。

しかし、そのようなことを通して神様の存在を感じたとしても、それだけでは意味がありません。というのは私たちがイエス・キリスト抜きで神様を知っても、それはほんとうに神様を知ることにはならないからです。私がそう言っても「それはクリスチャンの言うことであって、イエス・キリストを信じなくても神様がわかればいいではないか」とおっしゃる方が少なくないと思います。ところが、その方の考えておられる神様は聖書の神様ではないのです。その方はまだまことの神様がどんな方であるか、また自分はいったい何者であるかをご存じないと言えます。

神と自分との関係

そこで、私たちが神様をほんとうに知るためには、まず神様と人間との関係、もっと端的に言えば神様と自分自身との関係について知る必要があります。

聖書には人間とは何者であるかということがはっきり記されています。それは人間は神様がお造りになった被造物の一つであるということです。ただ他の被造物と違って、人間は神様が特別に愛して造られた被造物なのであります。その根拠は次のみことばに記されているように、神様が私たち人間をご自分に似るものとしてお造りになったということ、そしてご自分と親しく交わるために、ご自分のいのちの息、すなわち霊を私たち人間のからだの中に入れてくださったということから知ることができます。

神は、「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。……」と仰せられた。

（創世記1章26節）

神である主は、土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。

（創世記2章7節）

神様と人間の関係は、たとえれば親しい親と子の関係ということができます。神様はご自分に似る者として造られた人間をご自分の子どものように愛し、造り主であるご自分を愛し従う、父と子のような関係であることを望まれたのです。愛されている子どもは親にすなおに従います。ところが神様によって造られた最初の人間であり、私たち人間の先祖となったアダムは、神様から子どものように愛されていたにもかかわらず、神様から「この木の実だけは食べてはいけない。食べれば死ぬ」と言われていた知恵の木の実を、「この実を食べると神のように賢くなる」とサタンに誘惑され、神様と同じようになりたいと思い上がって、その禁じられていた木の実を食べるという恐ろしい行動をとってしまったのです。これが人間の神様に犯した罪のはじめであり、神様と人間の関係の断絶はここから始まってしまったのであります。これが原罪であります。これについてパウロは、

一つの違反（アダムの神様に対する背き）によってすべての人が罪に定められた

……

（ローマ人への手紙5章18節）

ひとりの人によって罪が世界にはいり、罪によって死がはいり、こうして死が全

人類に広がったのと同様に、……それというのも全人類が罪を犯したからです。

（ローマ人への手紙5章12節）

と言っています。このようにして遺伝子のように神様に対する背きの罪は人間の中にはいってしまったのです。

罪によって神と断絶した人間

神様のいのちの息を吹き込まれて造られたアダムの霊は、彼が造り主である神様と正しい関係によって結ばれているときには生き生きと正しく働き、神様といつも交わることができました。しかし彼が神様から背き離れたとたんに、彼の霊はこの罪のゆえに死んだように衰え果てて神様との交わりは絶たれてしまったのです。アダムがはじめの人間であるということは、アダムが人間の根であると言ってもよいと思います。根が腐ったら木全体も腐ります。それと同様にアダムの霊が腐ったためにアダムの枝である、すなわち子孫である全人類の霊も腐ってしまったのであります。

それゆえ、私たちの肉の思いはただ自己中心的な、自分の思いや自分の欲望に従うことになってしまいました。神様からいただいた霊が死んだように衰えてしまった人間は、こ

のように、ただ肉の思いに従って生きること、肉の思いを第一にして生きることしかできなくなってしまったのです。しかし当然のことながら、これは神様のみこころに反するものであります。パウロは次のように言っています。

肉の思いは神に対して反抗するものだからです。それは神の律法に服従しません。いや、服従できないのです。

（ローマ人への手紙8章7節）

神の律法とは、私たち人間に与えられた神様のみこころを示した戒めであります。もし私たちが律法を神様のみこころどおりに守ることができれば、神様は私たちを義と認めてくださいます。しかし私たちがどんなに神様の戒めを守っていると主張しても、私たちが原罪という生まれつきの罪の性質を持っているがために、それは自分流の、自分中心の従い方になってしまい、どうしても神様の求められるような完全な従い方ではないのです。

人は神の律法を正しく守れるか

イエス様は神様から与えられた律法、すなわち戒めを正しく守るとはこういうことであると、たとえをもって話されました。

昔の人々に、「人を殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければならない。」と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければなりません。

（マタイの福音書5章21～22節）

イエス様は人に腹を立てることは神様の基準では殺人であるとおっしゃっているのです。なぜなら、腹を立てた結果憎しみが湧き、それが殺人に至るからであります。また、次のようにもおっしゃいました。

「姦淫してはならない。」と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。

（マタイの福音書5章27～28節）

人間は表面に現われたものによって正しいか正しくないかを判断しますが、神様は心をご覧になってその人が正しいかどうかをさばかれます。イエス様はこのことを律法を正しく守るということに当てはめて、生まれながらの罪のために人間が神様の正しさと同じ正

しさで律法を守ることは不可能であるということを、これらのみことばを通して私たちに教えてくださっているのです。

また私たちは自分を誇るということは神様を知るまでは、それほど悪いこととは思っていませんでした。自分の業績、自分の生まれ育ち、自分の富、自分の権力など、すべてこれらを誇りたがるのが人間であります。しかし神様は自分を誇る人間をその高ぶりのゆえに罪ある者と見なされるのです。詩篇の作者は人間には誇るべきものは何一つなく、誇るべきは私たちを心から愛し、支え、助けてくださる私たちの主なるまことの神様だけであると言っています。

今こそ、私は知る。主は、油をそそがれた者（神様を信じた結果、神様の霊を注がれ、ふたたび霊的に生き返った者）を、お救いになる。主は、右の手の救いの力をもって聖なる天から、お答えになる。ある者はいくさ車を誇り、ある者は馬を誇る。しかし、私たちは私たちの神、主の御名を誇ろう。彼らは、ひざをつき、そして倒れた。しかし、私たちは、立ち上がり、まっすぐに立った。

（詩篇20篇6～8節）

主なる神様も預言者エレミヤの口をとおして次のように仰せられました。

主はこう仰せられる。「知恵ある者は自分の知恵を誇るな。つわものは自分の強さを誇るな。富む者は自分の富を誇るな。誇る者は、ただ、これを誇れ。悟りを得て、わたしを知っていることを。」

（エレミヤ書9章23～24節）

しかし前にも申しましたように、罪のために霊が死んだようになっている人間には、肉の目に見えない神様だけを誇ること、ましてその神様を知っていることだけを誇るというようなことは、とうてい考えられないのです。

義にして愛なる神

では、このように罪の結果、神様を顧みず自分を正しいと考え、自分を誇り、自分の欲を満たすことを第一としている人間を神様はどうされるでしょうか。神様はその完全に正しく完全に聖いご性質ゆえに、そのまま見過ごすことはおできになりません。罪の報酬は死であると聖書にあるように、罪を持ったまま死ぬとその人は肉体の死にとどまらず、死後にさばかれて永遠に神様から見放されて滅びるという罰を受けなければなりません。

しかし神様は全き義の方（まったく正しい方）であると同時に全き愛の方でもあります。

罪のために滅びの道を知らずに歩んでいる私たち人間を心からあわれんでくださって、もう一度ご自分に立ち返らせて、私たちと父と子の関係を回復させようとお考えになりました。このために障害となるのは私たちの罪であります。神様と私たちの間に罪という隔ての壁があるかぎり、私たちが聖い神様のもとに立ち返ることはできません。人間が自分の力でこの壁を取り除くことは決してできません。もし私たちが神様からいただいた律法を正しく守り行なうことができれば、そのような力が私たちにあれば、私たちは自分の力で罪の壁を取り除けるでしょう。しかしさきほど申しましたように、人間はだれひとりとして律法を正しく守ることはできないばかりか、守ろうとすればするほど自分の罪を思い知らされることになります。先ほどのローマ人への手紙8章7節をもう一度開いてみましょう。

というのは、肉の思いは神に対して反抗するものだからです。それは神の律法に服従しません。いや、服従できないのです。

（ローマ人への手紙8章7節）

とあったとおりです。

神と人との仲介者に求められる条件

罪のゆえに神様から離れて滅びるものとなってしまったあわれな私たち人間を罪の中から救い出すために、神様はご自分のひとり子の御子イエス・キリストを仲介者に立てられました。これは人間にはとうてい理解することのできないほど大きな神様の愛から出たご計画でありました。ここで神様と人間との仲介者となられたイエス様のみわざの内容を少し詳しく申しますと、神様と人間を隔てている罪を取り除いて神様と人間との関係を正しく回復し、罪人であった人間を神の子どもとし、永遠の滅びの国に行くしかなかった人間を神の国の相続人とすることであります。これはまことに人知をはるかに越えたみわざであると言うほかありません。このみわざを果たすためには第一に罪の報酬である死に勝利することができなければなりません。そのためには仲介者は死ぬことのない永遠のいのちを持っている必要があります。第二に罪そのものに勝利することができなければなりません。しかし、それには仲介者に完全な義、すなわち正しさが求められます。第三にこの世の支配者であるサタンに打ち勝つことができなければなりません。しかし、それには仲介者はサタンを上回る力を持っている必要があります。神でありながら人の子としてこの世

においでになったイエス様は以上の三つをすべて備えておられる、仲介者としてただひとりの最もふさわしい方なのであります。言いかえれば、イエス様以外にこのみわざを成し遂げることのできる方はないのであります。

また仲介者は一方だけに属するものでなく、双方の立場を十分に理解できる方でなければふさわしいと言うことはできません。イエス・キリストはその意味でも神と人との仲介者として唯一ふさわしい方と言えるのです。なぜならば、イエス様は神であられるのに人となって地上に降りて来てくださったお方であるからです。

イエス・キリストが神である証拠

イエス様が神様である証拠は聖書の至るところに見られますが、とくにイエス様の誕生や復活に関する事柄は人間には絶対に起こり得ないものであります。

イエス・キリストの誕生は次のようであった。その母マリヤはヨセフの妻と決まっていたが、ふたりがまだいっしょにならないうちに、聖霊によって身重になったことがわかった。夫のヨセフは正しい人であって、彼女をさらし者にはしたくなかったので、内密に去らせようと決めた。彼がこのことを思い巡らしていたとき、

主の使いが夢に現われて言った。「ダビデの子ヨセフ。恐れないであなたの妻マリヤを迎えなさい。その胎に宿っているものは聖霊によるのです。マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。」このすべての出来事は、主が預言者を通して言われた事が成就するためであった。

（マタイの福音書1章18～22節）

イエス様の復活の様子は次のようなものでした。

さて、週の初めの日の朝早くによみがえったイエスは、まずマグダラのマリヤにご自分を現わされた。イエスは、以前に、この女から七つの悪霊を追い出されたのであった。マリヤはイエスといっしょにいた人たちが嘆き悲しんで泣いているところに行き、そのことを知らせた。ところが、彼らは、イエスが生きておられ、お姿をよく見た、と聞いても、それを信じようとはしなかった。その後、彼らのうちのふたりがいなかのほうへ歩いていたおりに、イエスは別の姿でご自分を現わされた。そこでこのふたりも、残りの人たちのところへ行ってこれを知らせたが、彼らはふたりの話も信じなかった。しかしそれから後になって、イエスは、その十一人が食

卓に着いているところに現われて、彼らの不信仰とかたくなな心をお責めになった。それは、彼らが、よみがえられたイエスを見た人たちの言うところを信じなかったからである。

（マルコの福音書16章9～14節）

イエス・キリストが人である証拠

またイエス様が人である証拠もたくさんあります。人間であればだれでも空腹を覚え、疲れを感じ、また喉も渇きますが、イエス様も同様でした。

イエスは、悪魔の試みを受けるため、御霊に導かれて荒野に上って行かれた。そして、四十日四十夜断食したあとで、空腹を覚えられた。

（マタイの福音書4章1～2節）

イエスは旅の疲れで、井戸のかたわらに腰をおろしておられた。時は六時ごろであった。ひとりのサマリヤの女が水をくみに来た。イエスは「わたしに水を飲ませてください。」と言われた。

（ヨハネの福音書4章6～7節）

人間ならばだれでも死を恐れます。イエス様も捕えられて十字架に架かる時が迫って来たときに、死の恐怖に苦しみもだえながら祈られました。

「父よ。みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。」すると、御使いが天からイエスに現われて、イエスを力づけた。イエスは、苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた。

（ルカの福音書22章42～44節）

人間は生まれた以上だれでも一度肉体的に死にます。イエス様も私たちの罪を身代わりに負ってくださるために人として死を味わわれました。

そのときすでに十二時ごろになっていたが、全地が暗くなって、三時まで続いた。太陽は光を失っていた。また、神殿の幕は真二つに裂けた。イエスは大声で叫んで、言われた。「父よ。わが霊を御手にゆだねます。」こう言って、息を引き取られた。

（ルカの福音書23章44～46節）

神と人との仲介者がイエス・キリストでなければならぬ理由

なぜ神様と人との仲介者が神であると同時に人として私たちのところに来てくださったイエス様でなければならないのでしょうか。その理由は神ならば永遠のいのちを持った方ですから死ぬことはできず、また人であるだけならば死んでから再びよみがえることは決してできないからです。すなわち、神としての属性と人としての属性を併せ持つイエス・キリストだけが、人として私たち一人ひとりの罪のために身代わりとなって死んでくださることがおできになり、かつ神としての力によって死に勝利して死からよみがえり、そのいのちを私たちに与えてくださることがおできになるただひとりの方なのです。

イエス様はご自分が神と人との仲介者としての権威を持っておられることを次のようにおっしゃっています。

だれも、わたしからいのちを取った者はいません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。わたしには、それを捨てる権威があり、それをもう一度得る権威があります。わたしはこの命令をわたしの父から受けたのです。

（ヨハネの福音書10章18節）

死に勝利し、よみがえられたイエス様は今もご自分を信じ、ご自分に従おうとする一人ひとりのために仲介者として、いつも神様にとりなしてくださいます。それはイエス様を信じた後も、信仰の弱い私たちは肉の誘惑に惑わされて罪を犯してしまうことが多いからです。冒頭でもお読みしましたが、パウロは次のように言っています。

罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしていてくださるのです。

（ローマ人への手紙8章34節）

また聖書のヘブル人への手紙の中にも次のように記されています。

キリストは永遠に存在されるのであって、変わることのない祭司の務めを持っておられます。したがって、ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことがおできになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。

（ヘブル人への手紙7章24～25節）

けれども人間は愚かにも神様と私たちとの間のとりなしを、肉の目では見ることのでき

ないイエス様ではなく、目に見えるもの、たとえば、いわゆる聖人の像などの偶像や聖職者などの人間に求めてしまうことが多いものです。しかし、そのようなものに頼っても神様と私たちの間の壁は決して取り去られません。私たちは改めて私たちの主イエス・キリストだけがただおひとりのまことの仲介者として、私たちが罪から解放され、永遠に生きる者となるために十字架上での罪の身代わりの死という尊い犠牲を払って、父なる神様と私たち人間を和解させてくださったことを心から感謝せずにはいられません。そしてお一人でも多くの方が、そのイエス様をご自分の救い主と心から信じ、従うことがおできになるように心からお祈りいたします。最後に次のみことばを読んで終わりたいと思います。

この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。

（使徒の働き4章12節）

三　神の近くにいることが幸せ

あなた（神様）から遠く離れている者は滅びます。あなたはあなたに不誠実な者をみな滅ぼされます。しかし私にとっては、神の近くにいることが、しあわせなのです。私は、神なる主を私の避け所とし、あなたのすべてのみわざを語り告げましょう。

（詩篇73篇27～28節）

人間にとってほんとうの幸せとは、またほんとうの不幸とは何でしょうか。この詩篇の作者アサフは人間にとってほんとうの幸福はまことの神様の近くで生きることであり、ほんとうの不幸はまことの神様から離れていることであると言っているのです。これは真理であります。

この世の人の感じる幸せ

しかし、多くの方にとって、この言葉はまったく理解できないものでありましょう。どうしてでしょうか。それはまことの神様をご存じないからであります。そして、まことの神様をご存じない方々にとって幸せと感じられることは、あくまでも人間的な基準、願望による幸せだからであります。たとえば希望していた学校に入れたとき、希望していた会社に就職できたとき、望んでいた相手と結婚できたとき、望んでいた子どもが生まれたときなど、すべて自分の肉の願望が適えられる場合、人は幸せと思うのではないでしょうか。しかし、このような幸せがほんとうの幸せであるのか、いつまでも続く幸せであるのかといえば、どなたもそうはお考えにならないでしょう。なぜならたとえ希望の学校に入ったとしても、希望していた会社に就職したとしても、望んでいた相手と結婚できたとしても、望んでいた子どもが生まれたとしても、またどんな楽しみを得たとしても、その後に次から次と心を痛めるような問題が起こって来て、初めに抱いていた幸せ感は次第に薄らぎ、気がついてみると、さまざまな重荷を負って疲れた心で歩んでいる自分を見いだすという体験を多くの方がなさっておられるからです。このほか、富、権力、名声、健康など、こ

の世で一生けん命努力すれば手に入れることができるすべてのものを労苦して追い求めたとしても、人間の欲によってはほんとうの心の満たし、ほんとうの幸せに到達することはできないのです。これについて世界一の知恵者と言われ、莫大な富と力と名声を得たソロモン王は聖書の中で次のように嘆いています。

私は、私の目の欲するものは何でも拒まず、心のおもむくままに、あらゆる楽しみをした。実に私の心はどんな労苦をも喜んだ。これが、私のすべての労苦による私の受ける分であった。しかし、私が手がけたあらゆる事業と、そのために私が骨折った労苦とを振り返ってみると、なんと、すべてがむなしいことよ。風を追うようなものだ。日の下には何一つ益になるものはない。

（伝道者の書2章10～11節）

このようにこの世のさまざまな宝を内容とする幸福は、つねに不完全なものであります。

人間が完全な幸せを失った理由

これに対して、もう一つの幸福は完全なものであって、その幸福は神様の近くにのみ存在するものであります。

かつて人間は神様の近くに置かれて神様のご愛を一身に受け、幸せいっぱいでした。その人間とは神様が最初にお造りになったアダムであります。しかし、アダムとその妻は聖書に記されているように、神様から、

あなたは、（エデンの）園のどの木からでも思いのまま食べてよい。しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ。

（創世記2章16～17節）

と言われた木の実を、「食べても死ぬことはない、食べると神のようになれる」という蛇の姿をとったサタンの誘惑の言葉に負けて、神様の戒めを破った結果、エデンの園から追放されてしまったのです。神様のみもとから離れたアダムとエバにはもう幸せはありませんでした。神様に背いた彼らは、神様の定めによって地上で一生労苦して働き、最後にはちりに帰る、すなわち死ななければならなかったのです。しかし、神様はアダムとエバをエデンの園から追放するとき、彼らの裸をおおう皮の衣を作って着せてくださいました。聖書に、

神である主は、アダムとその妻のために、皮の衣を作り、彼らに着せてくださっ

た。

（創世記3章21節）

とあります。まことの神様は全き義なる方であるがゆえに、ご自分の戒めに背いたアダムとエバに厳しい罰をお与えになりましたが、そのような者をも深くあわれんでくださったのです。神様に対する罪を犯したアダムとエバのために皮の衣を作り、着せてくださったというあわれみのみわざは、アダムからすべての人間が受け継いだ一人ひとりの人間の中にある罪を、神の御子イエス様の十字架上での贖いによっておおってくださったという救いのみわざを象徴するものであります。このように、まことの神様は義なる方であるだけでなく、あわれみに富んだ愛の方でもあるのです。

アダムの罪を受け継いだ人間の不幸

さて今まで申しましたように、アダムが神様に不従順の罪を犯したきっかけは、神のようになりたいというアダムの高ぶった欲望が原因でした。そしてこの罪の性質はアダムだけにとどまらず、アダムの血を受け継いだすべての人間に、生まれつきの性質として受け継がれているのです。これが原罪といわれるものであります。

そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界にはいり、罪によって死がはいり、こうして死が全人類に広がったのと同様に、……それというのも全人類が罪を犯したからです。

（ローマ人への手紙5章12節）

とパウロが言っているのはこのことであります。

しかし、この世の人々は原罪、すなわちアダムが犯した神様に対する背きの罪を自分が受け継いでいるということが理解できません。むしろそのような考えは愚かなこと、馬鹿げたこととして無視します。しかし、原罪を受け継いでいる事実は、神様を恐れずに自分を主権者として、自分を第一として、自分の主張を、自分の考えをよしとして生きている高ぶった人間の姿の中にはっきりと現われているのです。そしてその結果はどうでしょうか。創造主であり、万物の支配者であられる神様から離れ、自分を主権者とした人間は、憎み、争い、さばき、傷つけ、悲しみ、苦しむ者となってしまったのです。そのような人間にほんとうの幸せがあるはずはありません。人間のこの罪の姿が日々赤裸々に示されている今の世の中の有様を見るにつけ、私たちはみなそのことを実感しているのではないでしょうか。

そして、このように神様から離れたまま自分を主権者として、自らの思いのままにふるまいながら生き続けますと、冒頭のみことばに「神様から遠く離れた者は滅びます」とありましたように、また、パウロがテサロニケの教会の信者に宛てた手紙で、

そのとき（神様がさばかれる最後の審判の日）主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます。そのような人々は、主の御顔の前とその御力の栄光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受けるのです。

（テサロニケ人への手紙第二1章8～9節）

と記しているように、やがて来る神様のさばきの日に、神様によって永遠の滅びの刑罰を受けるという恐ろしい不幸に会わなければならないのです。

唯一の主権者はまことの神のみ

このように自分を主権者と考えることは恐るべき人間の傲慢なのであります。唯一の主権者は人間ではなく、まことの神様であります。パウロは弟子のテモテに宛てた手紙で、まことの神様について次のように述べています。

神は祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主、ただひとり死のない方であり、

近づくこともできない光の中に住まわれ、人間がだれひとり見たことのない、また見ることのできない方です。誉れと、とこしえの主権は神のものです。アーメン。

（テモテへの手紙第一6章15～16節）

このみことばにあるように、まことの神様は「唯一の主権者」、すなわち唯一の絶対的な権威を持つ神であられます。神様は天地万物を創造なさり、それらの被造物をみこころのままに支配しておられる主権者であります。よく人は自分の不幸を嘆くときに、あるいは自分の思いどおりにならないときに「神などいない」と言いますが、それは自分を主権者としたまことに傲慢な言い分であります。神様はご自分が主権者であり、ご自分の自由なご意志で私たちに臨まれることを、次のようなみことばで私たち人間にはっきり宣言しておられるのです。

わたしは、恵もうと思う者を恵み、あわれもうと思う者をあわれむ。

（出エジプト記33章19節）

この神様の絶対的な権威についてパウロは次のように私たち人間を諭しています。

すると、あなたはこう言うでしょう。「それなのになぜ、神は人を責められるのですか。だれが神のご計画に逆らうことができましょう。」しかし、人よ。神に言

い逆らうあなたは、いったい何ですか。形造られた者（神様に造られた人間）が形造った者（造り主なる神）に対して、「あなたはなぜ、私をこのようなものにしたのですか。」と言えるでしょうか。

（ローマ人への手紙9章19～20節）

聖く正しい神に近づくために必要な罪の贖い

また、まことの神様は先ほどのテモテへの手紙第一のみことばにあったように「近づくことも見ることもできない方」であります。まだ罪を犯していなかったときのアダムは神様のみそば近くで御顔を見ることができました。しかし、完全に聖く正しい方である神様は、そのご性質のゆえに罪に汚れてしまった人間を決して近づけられません。まして見ることも許されません。ですからもし罪を持ったままの人間が神様に近づこうとすれば、神様を見ようとすれば、生きていることはできません。しかし、預言者のイザヤは神様を見てしまったのです。そのときのことをイザヤは次のように記しています。

ウジヤ王（ユダ王朝の十代目の王）が死んだ年（紀元前七四二年）に、私は、高くあげられた王座に座しておられる主を見た。そのすそは神殿に満ち、セラフィム

（神に仕える御使い）がその上に立っていた。彼らはそれぞれ六つの翼があり、おのおのその二つで顔をおおい、二つで両足をおおい、二つで飛んでおり、互いに呼びかわして言っていた。「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。その栄光は全地に満つ。」その叫ぶ者の声のために、敷居の基はゆるぎ、宮は煙で満たされた。そこで、私は言った。「ああ、私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者（罪に汚れた者）で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。しかも万軍の主である王を、この目で見たのだから。」すると、私のもとに、セラフィムのひとりが飛んで来たが、その手には、祭壇の上から火ばさみで取った燃えさかる炭（罪の聖めのために焼かれたいけにえの炭）があった。彼は、私の口に触れて言った。「見よ。これがあなたのくちびるに触れたので、あなたの（神に対する）不義は取り去られ、あなたの（神に対する）罪も贖われた。

（イザヤ書6章1～7節）

まことの神様を見たイザヤが死ななかったのはどうしてでしょうか。それは聖い神様の前に自分が汚れた者であることを認めて神様を恐れ、御前にへりくだったイザヤの態度を神様がよしとされ、罪の贖いのために神様への捧げ物として焼かれた動物の灰……これはイ

エス・キリストの十字架の上で流された血を象徴していますが、……にイザヤが触れたことによって罪が贖われたからであります。

このように、神様から離れたために不幸になった私たち人間が、聖く正しい神様に近づくためには、神様に対する罪が贖われていることがどうしても必要であります。しかし、神様のご愛は完全でありました。この拭うことのできない原罪という罪を完全に贖ってくださるために、神様は動物のいのちではなく、尊い神の御子イエス様のいのちを私たちの身代わりとして十字架に架けてくださったのです。これについてパウロは、コロサイ人の信者に宛てた手紙で、

あなたがたも、かつては神を離れ、心において敵となって、悪い行ない（自分中心の生き方）の中にあったのですが、今は神は、御子の肉のからだにおいて、しかもその死によって、あなたがたをご自分と和解させてくださいました。それはあなたがたを、聖く、傷なく、非難されるところのない者として御前に立たせてくださるためでした。

（コロサイ人への手紙1章21～22節）

と言っています。神様から離れて不幸になった私たちを、もう一度ご自分の近くに置き、

ほんとうの幸いを与えようとして、このような考えられない救いのご計画を成就してくださった神様と御子イエス様の深い深いご愛に、私たちはただ心から感謝するばかりです。

神の近くに置かれた者の幸せ

このようにして罪から贖い出されて神様の近くに置いていただいた者の幸せについて、もっと具体的にごいっしょに考えたいと思います。

その幸せとはまず、神様の近くに置いていただいた者は永遠のいのちを与えられて、天の御国の相続人とされているという確かな希望に基づく幸せであります。ペテロはイエス様を救い主と信じた人々に宛てた手紙の中で、

私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせて、生ける望みを持つようにしてくださいました。また、朽ちることも汚れることも、消えて行くこともない資産を受け継ぐようにしてくださいました。これはあなたがたのために、天にたくわえられているのです。

（ペテロの手紙第一1章3～4節）

と言っています。神の御子イエス様は私たちの罪の身代わりに死んでくださったばかりか、三日後によみがえられて、信じる者にご自分の永遠のいのちを与えてくださり、「朽ちることも汚れることも、消えて行くこともない資産を受け継ぐ者」、すなわち天の御国の相続人としてくださり、すでに信じる者の名は天の御国に登録されているのです。

また、神様の近くに置いていただいた者の幸せは、神様の力によってすべての災いから永遠にいのちが守られているという幸せであります。詩篇一二一篇の作者は、これについて次のように感謝しています。

主は、あなたを守る方。主は、あなたの右の手をおおう陰。昼も、日が、あなたを打つことがなく、夜も、月が、あなたを打つことはない。主は、すべてのわざわいから、あなたを守り、あなたのいのちを守られる。主は、あなたを、行くにも帰るにも、今よりとこしえまでも守られる。

（詩篇121篇5～8節）

また、神様の近くに置いていただいた者の幸せは、神様から決して忘れられることはないという幸せであります。神様が御子のいのちによって罪から贖い出して、ご自分の近く

に置かれた者を神様はご自分の手のひらに刻んだ、すなわち決して忘れないと預言者イザヤの口を通して仰せになっています。

女が自分の乳飲み子を忘れようか。自分の胎の子をあわれまないだろうか。たとい、女たちが忘れても、このわたしはあなたを忘れない。見よ。わたしは手のひらにあなたを刻んだ。

（イザヤ書49章15～16節）

また、神様の近くに置いていただいた者の幸せは、神様のものとされ、いつも神様が共にいてくださり、どんな試練のときも守ってくださるという幸せであります。イザヤはこれについて次のように言っています。

あなたを形造った方、主はこう仰せられる。「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。あなたが水の中を過ぎるときも、わたしはあなたとともにおり、川を渡るときも、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。」

（イザヤ書43章1～2節）

冒頭の詩篇七三篇の作者アサフも試練を受けた人でした。彼は先ほどお読みした前のと

ころで、試練に会ったときの心の葛藤と、そのときに神様が彼を守ってくださったことを次のように言い表しています。

私の心が苦しみ、私の内なる思いが突き刺されたとき、私は、愚かで、わきまえもなく、あなた（神様）の前で獣のようでした。しかし私は絶えずあなたとともにいました。あなたは私の右の手をしっかりつかまえられました。あなたは、私をさとして導き、後には栄光のうちに受け入れてくださいましょう。天では、あなたのほかに、だれを持つことができましょう。地上では、あなたのほかに、私はだれをも望みません。

（詩篇73篇21～25節）

このように神様の近くに置かれている者も、地上にいる間はさまざまな試練がありますが、その試練をとおして神様はご自分を心から信頼し、ご自分にしっかり拠り頼む者にますますご自分の愛を現わしてくださり、ほんとうの幸せとはご自分の近くにいることであり、ご自分を避けどころとすることであるとはっきりわからせてくださるのです。

そして神様の近くに置いていただいている者の幸せとは、

わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。

（イザヤ書43章4節）

と個人的にいつも呼びかけてくださる神様の愛に包まれている幸せ、そのような神様にこよなく愛されているという事実に基づく幸せであります。

もし、まだこの世のものに幸せがあると思って探し求めておられる方がありましたら、ほんとうの幸せはこの世のものに求めても得ることはできないこと、ほんとうの幸せはまことの神様の近くにいることにこそあることをどうか知っていただきたいと思います。そしてまことの神様の近くに行くために、すなおに神様の前にへりくだって神様に犯して来た自分を主権者として生きるという背きの罪を悔い改め、あなたの罪の身代わりとなって十字架に架かってくださったイエス様を救い主として信じ受け入れてくださいますように、心からお祈りいたします。

最後に詩篇六五篇をお読みして終わります。

幸いなことよ。あなた（まことの神様）が選び、近寄せられた人、あなたの大庭に住むその人は。私たちは、あなたの家、あなたの聖なる宮の良いもので満ち足りるでしょう。

（詩篇65篇4節）

四　「九人はどこにいるのか」

ある村にはいると、十人のらい病人がイエスに出会った。彼らは遠く離れた所に立って、声を張り上げて、「イエスさま、先生。どうぞあわれんでください。」と言った。イエスはこれを見て、言われた。「行きなさい。そして自分を祭司に見せなさい。」彼らは行く途中でいやされた。そのうちのひとりは、自分のいやされたことがわかると、大声で神をほめたたえながら引き返して来て、イエスの足もとにひれ伏して感謝した。彼はサマリヤ人であった。そこでイエスは言われた。「十人いやされたのではないか。九人はどこにいるのか。神をあがめるために戻って来た者は、この外国人のほかには、だれもいないのか。」

（ルカの福音書17章12～18節）

今日は聖書のこの箇所から、イエス様がおっしゃった「九人はどこにいるのか」というみことばの意味について、ごいっしょに考えたいと思います。

らい病をいやされた人々の取った態度

聖書にはイエス様が三年にわたる福音伝道のご生涯の間に、じつに多くの病人をいやされたことが記されています。とくにルカは医者だったからでしょうか、ルカの福音書にはイエス様がいろいろな病人をいやされた様子がくわしく記されています。そのうちの一つがここにある十人のらい病人のいやしの記事であります。そしてこの記事の重点はイエス様がらい病をいやされたということにあるのではなく、病気をいやされた後の十人の行動についてイエス様がおっしゃったことにあるのです。

主イエスに病をいやされた三人の例

イエス様に病気をいやしていただいた者が、いやされたときにどのような行動を取ったかについて、ルカの福音書にはこの十人のらい病人の例のほかにも次の三人の例が記されています。

まずイエス様によって悪霊を追い出していただいた人の例を見てみましょう。

そのとき、悪霊を追い出された人が、お供をしたいとしきりに願ったが、イエス

はこう言って彼を帰された。「家に帰って、神があなたにどんなに大きなことをしてくださったかを、話して聞かせなさい。」そこで彼は出て行って、イエスが自分にどんなに大きなことをしてくださったかを、町中に言い広めた。」

（ルカの福音書8章38～39節）

彼はイエス様のお供をしたいと心から望んだのですが、イエス様のお考えは彼の望みとは違ったものでした。彼は自分の思いを通すことなく、イエス様の仰せにすなおに従って家に帰り、自分の身の上に起こった大いなるイエス様のご栄光の現われとしてのみわざを町中に証ししたのです。

次は曲がった腰を直していただいた女の例であります。

イエスは安息日に、ある会堂で教えておられた。すると、そこに十八年も病の霊につかれ、腰が曲がって、全然伸ばすことのできない女がいた。イエスは、その女を見て、呼び寄せ、「あなたの病気はいやされました。」と言って、手を置かれると、女はたちどころに腰が伸びて、神をあがめた。

（ルカの福音書13章10～13節）

このように彼女は長年苦しんでいた腰の病気が直ったとき、神様に感謝し、神様をあが

めたのです。

三番目は目を直していただいた盲人の例です。

イエスがエリコに近づかれたころ、ある盲人が、道ばたにすわり、物ごいをしていた。群衆が通って行くのを耳にして、これはいったい何事ですか、と尋ねた。ナザレのイエスがお通りになるのだ、と知らせると、彼は大声で、「ダビデの子のイエスさま。私をあわれんでください。」と言った。彼を黙らせようとして、先頭にいた人々がたしなめたが、盲人は、ますます「ダビデの子よ。私をあわれんでください。」と叫び立てた。イエスは立ち止まって、彼をそばに連れて来るように言いつけられた。彼が近寄って来たので、「わたしに何をしてほしいのか。」と尋ねられると、彼は、「主よ。目が見えるようになることです。」と言った。イエスが彼に、「見えるようになれ。あなたの信仰があなたを直したのです。」と言われると、彼はたちどころに目が見えるようになり、神をあがめながらイエスについて行った。

（ルカの福音書18章35～43節）

彼は目が見えるようになった後、神様をあがめながらイエス様に従って行きました。以上のように、これらの三人はイエス様に病気を直していただいたことをただ喜んだだけで

はありませんでした。病気がいやされたことを神様に感謝し、神様をあがめ、ひとりはイエス様の仰せに従って自分の上に起こされた神様の大きなみわざを証しし、またふたりはイエス様に従って行ったのです。自分の身の上に起こった大いなる主のみわざを臆することなく証しすること、自分の病をいやしてくださった主に心から信頼して従うこと、このような態度をイエス様は喜ばれるのです。

らいの病をいやされたことを感謝しに戻って来た者は十人中わずかひとり

ところが、冒頭に挙げた例ではどうだったでしょうか。らい病を直していただいた十人のうち、イエス様のところに感謝しに戻ってきた者は、たったひとり、しかも異邦人であるサマリヤ人だけだったのであります。

十人のらい病人は前々からイエス様のうわさを伝え聞いていて、この方こそ自分の病気をいやしてくださる方と堅く信じていたのだと思われます。だからこそ、イエス様が目の前にいる自分たちに手もくだされずに、ただ「行きなさい。そして自分を祭司に見せなさい」とおっしゃった、そのみことばにすなおに従って自分のからだを祭司に見せに行ったのであります。イエス様が彼らに自分のからだを祭司に見せなさいとおっしゃったわけは、

当時ユダヤではらい病が直ったかどうかの判定は祭司だけが行なっており、祭司が認めてはじめてらい病人は公に直ったことが認められて社会に戻ることができるからなのです。イエス様の前にいたときには彼らのからだにはまだらいの症状がはっきり出ていたのですから、彼らはなぜ直ってもいないからだを祭司に見せに行くのか、イエス様のみこころはとんと理解できなかったでしょう。しかし彼らはどうしてですかと聞くこともせず、ただイエス様を信じ、仰せに従ったのです。

今でこそらい病は抗生物質の開発によって完全に直せるようになり、まったく恐れることはなくなりましたけれども、この病気は昔から長い間世界中でもっとも恐れられていた伝染病の一つでした。ですからこの病気に罹った人は、一生世間の人々との接触も許されず、人々から忌み嫌われながら小さくなって生きていかなければならなかったのです。らい病に罹った人々の苦しみ、悲しみはどれほどだったか、今の私たちには想像もできません。

イエス様は病人をいやされたときに、よく「あなたの信仰があなたを直したのです」とおっしゃいますが、イエス様はこの十人のらい病人にも、ご自分を信じたその信仰をお認めになって病気をおいやしになりました。彼らは祭司のところに行く道の途中で自分のか

らだに現われていたらい病の症状がすっかり消えていることに気づきました。彼らの喜びはどんなに大きかったことでしょうか。「一生直らないと思って悲しみ苦しんでいた病気が直った。イエス様を信じてほんとうによかった」と彼らはみな心から感謝したことでしょう。

しかし九人のユダヤ人が感謝したのはそのときだけでした。彼らはいやされたからだによってこの世の快楽をおおいに味わおうと喜び勇んで行ってしまいました。ひとり異邦人であるサマリヤ人だけが引き返してきて、イエス様の足元にひれ伏していやされたことを心からイエス様に感謝したのです。そのときイエス様は「あとの九人はどこにいるのか。神をあがめるために、戻ってきた者は、この外国人のほかには、だれもいないのか」とお嘆きになったのです。

病をいやされた者に対して主イエスは何を求められるか

イエス様がお嘆きになった理由は何でしょうか。九人がご自分に礼を言うために戻って来なかったからでしょうか。そうではありません。彼らが神様をあがめなかったからであります。イエス様はご自分のすることはすべて主なる神様のなさることであると次のよう

におっしゃっています。

わたしが天から下って来たのは、自分のこころを行なうためではなく、わたしを遣わした方のみこころを行なうためです。

（ヨハネの福音書6章38節）

このようにイエス様はご自分のなさったいやしのみわざは、神様のみこころによるものだから、病気をいやされた者はイエス様をあがめるのではなく、神様に感謝し、神様を主とあがめることを望んでおられるのです。しかしイエス様のところに戻ってきたのは九人のユダヤ人ではなく、彼らから異邦人と軽蔑されていたサマリヤ人ひとりでした。ユダヤ人は自ら認めるように、神様の一方的な恵みによって多くの民の中から神の民として選ばれた人々であります。ですからユダヤ人はその恵みに応えて日々の生活の中で主なる神様を礼拝し、神様の戒めを守って心から従うことが求められています。聖書には次のように記されています。

イスラエルよ。今、あなたの神、主が、あなたに求めておられることは何か。それは、ただ、あなたの神、主を恐れ、主のすべての道に歩み、主を愛し、心を尽くし、精神を尽くしてあなたの神、主に仕え、あなたのしあわせのために、私が、きょ

う、あなたに命じる主の命令と主のおきてとを守ることである。

（申命記10章12～13節）

しかし彼らは自分たちが神様に選ばれた民であることを誇るだけで、神様を主とあがめることも、主なる神様の戒めを守ることもしませんでした。

人間の罪を身代わりに負うために神の御座から下りて、この世に人となっておいでになったイエス様は、たんなるあわれみによって多くの病人をいやされたのではありません。イエス様のみこころは、病気のために長いこと苦しみ悩んでいた人が、ご自分を信じて病気がいやされた体験をとおして主なる神様の愛を知り、神様から離れていた自分に気づいて神様に立ち返り、心から神様に感謝し、神様を主とあがめることなのであります。

罪がいやされた後に取る行動

しかし、この十人のらい病人のいやしの記事は、イエス様を信じる者にも大切なことを示唆しているのではないでしょうか。それはらい病とは比較できないほど恐ろしい病気、医学がどんなに進歩しても決して直すことのできない罪という病気をイエス様によっていやしていただいた者が、罪いやされた後どんな態度を、どんな行動を取ったかを改めて考

えるように私たちに示唆しているのだと思うのです。イエス様は、

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。

（マタイの福音書11章28節）

と招いてくださっています。人生の重荷は罪から生じます。罪とは私たち人間を造ってくださり、ご自分の子どものように愛してくださる、生けるまことの神様を認めずに自分中心に生きることであります。しかし、人生を自分の考えで歩み、すべてを人間的な基準で判断することしかできなければ、人は生きることの中で悩み、また病気や死の問題で恐れ、苦しまなければなりません。イエス様はこのように自己中心に生きた結果、多くの重荷を負ってあえぎ苦しみ、疲れ果てた私たちをご覧になり、深くあわれんでくださって、神様のもとに立ち返って神様を主とあがめるように、自ら私たちの罪を身代わりに負って十字架に架かって、私たちを罪の重荷から解放してくださったばかりか、ご自身の復活に与かるよみがえりのいのちまで与えてくださったのです。

イエス様を信じた私たちは、ただイエス様のお招きに応じて罪の重荷を、人生の重荷を負ったそのままでイエス様のみもとに行き、自分が神様に背いていたことを心から悔い改

め、イエス様の前にへりくだって救いを求めた結果、みことばどおり、イエス様は罪の重荷を身代わりに負ってくださり、霊的な休息と安らぎをいただくことができました。聖書に、

罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。

（ローマ人への手紙6章23節）

とあるように、イエス様を信じて罪から生じた重荷から解放され、また罪の報酬である死への恐怖から解放されたとき、私たちは大いに喜び、神様の恵みに心から感謝したのではなかったでしょうか。しかし、その後私たちはどうしたでしょうか。重荷を下ろして自由になってから時間がたつにつれて、だんだんと重荷を負っていたときの苦しみを忘れ、イエス様のいのちと引き替えにいただいた罪からの救いに対する深い感謝の思いも薄れ、神様やイエス様から心が離れ、ふたたびこの世に心を奪われてしまっているのではないでしょうか。イエス様を信じ、その証しとして洗礼を受け、規則正しく礼拝に出席してはいても、もし心が主なる神様やイエス様から離れているようでは、らい病をいやされたあの九人のユダヤ人と何ら変わりがないのです。なぜなら神様は形式だけの受洗や礼拝はお認

めにならないからです。イエス様が、

神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。

（ヨハネの福音書4章24節）

とおっしゃっているとおりであります。そしてイエス様はご自分のいのちをもって罪から贖い出したにもかかわらず、恵みだけを受けて心がご自分から離れ去った者に対して、九人のユダヤ人のときと同じように「あなたはどこに行ったのか」とお嘆きになるのであります。

いっぽう、サマリヤ人の取った態度は、罪という恐ろしい病気から解放してくださったイエス様に心からの賛美と感謝をささげ、神様をあがめ、イエス様に従う者の態度であります。詩篇一〇七篇には罪から救い出された者のなすべきことが歌われています。

愚か者は、自分のそむきの道のため、また、その咎のために悩んだ。彼らのたましいは、あらゆる食物を忌みきらい、彼らは死の門にまで着いていた。この苦しみのときに、彼らが主に向かって叫ぶと、主は彼らを苦悩から救われた。主はみことばを送って彼らをいやし、その滅びの穴から彼らを助け出された。彼らは、主の恵

みと、人の子らへの奇しいわざを主に感謝せよ。彼らは、感謝のいけにえをささげ、喜び叫びながら主のみわざを語れ。

（詩篇107篇17～22節）

ここに「主はみことばを送って」とある「みことば」とは、ヨハネの福音書に、

ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。

（ヨハネの福音書1章14節）

とあるように神の御子イエス様のことであります。この詩篇の作者は、ここでイエス様によって滅びの穴である罪から助け出された者は、神様とイエス様に感謝し、喜びながら臆することなくその救いのみわざを語り広めなさいと言っているのであります。イエス様はこのような信仰をお喜びになり、そのような者を用いてご自身のご栄光を現わされるのであります。

あなたはどちらに属しているか

これまでごいっしょに考えてきましたように、イエス様を信じる信仰によって、永遠の滅びに至る罪という恐ろしい病気をいやされたばかりか、イエス様ご自身のよみがえりのいのちをも与えていただいた者は、神様とイエス様の大きな愛とあわれみに触れて、自分の考えや思いに従ってきたそれまでの生き方が、いかに恐ろしいものであったかをつくづく知ったはずであります。そして、神様とイエス様にただ感謝と賛美をささげるだけではなく、神様とイエス様を自分の主とし、自分をそれほどまでに愛してくださる主を第一とする生き方、言いかえれば主の前にへりくだって主に従う者としていただきたいと心から望むのではないでしょうか。イエス様はそのような者をみこころにかなう者として喜んで弟子としてくださるのであります。

しかし、前にも申しましたように、今日でも神様、イエス様のご愛とあわれみによって恐ろしい罪という病気を直していただいた十人中九人は、イエス様に罪の病の苦しみから解放していただいたそのときは大いに喜びましたが、そのうちに主の愛を、恵みを感謝する思いも冷めて、またイエス様から心が遠くに離れて行ってしまっているのではないで

しょうか。イエス様はその人たちに「あなたはどこに行ったのか」と嘆きつつ呼びかけておられ、またそのような者に、

あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行ないをしなさい。

（ヨハネの黙示録2章4～5節）

と諭しておられるのであります。

私たちはらい病がいやされたことを喜んだだけで、イエス様から離れ去って行った九人のユダヤ人のように、救い主、いやし主イエス様を嘆かせるような恩知らずな者なのでありましょうか、それともいやされたことを知ってイエス様のみもとに帰ってきて神様をあがめたサマリヤ人のような、イエス様のみこころにかなう者なのでありましょうか。主のご再臨が間近に迫っている今、ここでごいっしょに自分の信仰を吟味し、もし自分も九人のユダヤ人と同じだと示されたならば、ただちに心から悔い改めてイエス様に立ち返り、神様やイエス様に喜んでいただけるような、主に従う信仰の歩みをすることができるように御霊の助けとお導きを祈ろうではありませんか。

五　神の杖

主は彼に仰せられた。「あなたの手にあるそれは何か。」彼は答えた。「杖です。」すると仰せられた。「それを地に投げよ。」彼がそれを地に投げると、杖は蛇になった。モーセはそれから身を引いた。主はまた、モーセに仰せられた。「手を伸ばして、その尾をつかめ。」彼が手を伸ばしてそれを握ったとき、それは手の中で杖になった。「これは、彼らの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、主があなたに現われたことを、彼らが信じるためである。」

（出エジプト記4章2～5節）

今日は聖書のこの箇所を通して神様がモーセに与えられた杖について、そしてまた今日の私たちキリスト者に与えられている神の杖について、ごいっしょに考えてみたいと思います。

モーセの生い立ち

モーセの生い立ちはたいへん波乱に富んだものでした。出エジプト記の一章から二章には彼の生い立ちが書かれています。かつてアブラハムの時代、イスラエル人は神様が与えると約束してくださったカナンに移り、その地に住んでいました。しかしその後カナンは大きな飢饉に襲われ、そのためエジプトに逃れ住んだイスラエル人は、そのエジプトの地でどんどん増え広がりました。イスラエル人が増えてエジプトを脅かすようになるのではないかと恐れたパロ（ギリシャ語ではファラオ、エジプトの王）は、イスラエル人を虐待して奴隷のように苦役で苦しめ、またイスラエル人の男の子が生まれたらナイル川に投げ込んで殺すように命じました。しかし、モーセの両親は生まれたばかりの彼を殺すに忍びず、パロの命令に背いてモーセをパピルスで編んだ籠に入れてそっとナイルの岸辺に置いたのです。そして、そこに水浴びに来たパロの娘がモーセを見付け、彼は宮殿に連れて行かれ、それからパロの娘の養子として育てられることになりました。しかし自分の生い立ちを知ったモーセは、四十才のとき、ひとりのイスラエル人がエジプト人に打ち叩かれているのを見て、自分と同国人であるイスラエル人の男を助けるために、彼を打ち叩いてい

たエジプト人を殺してしまいます。そのためパロの怒りを恐れた彼はミデヤンの地に逃れ、そこで祭司レウエルの娘と結婚し、それから四十年の間荒れ野で羊を飼ってひっそりと暮らしていました。

モーセに出会われた神

神様はその八十才の年老いたモーセをご自分のしもべとして一方的にお選びになり、ホレブの山（シナイ山）で燃える柴の中から声をかけられ、モーセにエジプトで虐げられているイスラエルの民を率いてエジプトから連れ出すようにお命じになったのです。

今、行け。わたしはあなたをパロのもとに遣わそう。わたしの民イスラエル人をエジプトから連れ出せ。

（出エジプト記3章10節）

モーセはどんなに驚いたことでしょうか。どうして神様は自分のような羊飼いの老人にそのような大役をお命じになるのか、とても自分にはできないと思った彼は神様に申し上げました。

私はいったい何者なのでしょう。パロのもとに行ってイスラエル人をエジプトか

ら連れ出さなければならないとは。

（出エジプト記3章11節）

神様はモーセに仰せになりました。

わたしはあなたとともにいる。これがあなたのためのしるしである。わたしがあなたを遣わすのだ。あなたが民をエジプトから導き出すとき、あなたがたは、この山で、神に仕えなければならない。

（出エジプト記3章12節）

神様は冒頭のみことばにあるように、彼の持っている杖によってご自分の力をお示しになりました。そして「これがわたしはあなたとともにいるしるしである」と励まされたモーセは、ようやく仰せに従う決心をしました。

モーセに与えられた「わたしはあなたとともにいる」というしるしの杖

羊飼いの杖は羊を狼から守るためや羊を導くためになくてはならぬ道具でした。その杖を神様は蛇に変え、神様に命じられたように彼がその蛇の尾をつかむと、彼の手の中でそれはまた杖になったのです。蛇はアダムを惑わしたサタンを象徴するものであり、またそ

れはイスラエルの民を苦しめるパロをも象徴するものでした。神様はご自分を信頼し、ご自分に拠り頼んでいれば、パロもイスラエルの民も恐れることはないと、モーセに力ある証拠をもってお示しになったのです。モーセは神様の仰せに従ってミデヤンの地からエジプトに帰りました。そしてその手には神様が「これでしるしを行わなければならない」と仰せになった杖、神様が「わたしはあなたとともにいる。これがあなたのためのしるしである」と仰せになったあの杖を持っていたのです。

モーセは妻や息子たちを連れ、彼らをろばに乗せてエジプトの地へ帰った。モーセは手に神の杖を持っていた。

（出エジプト記4章20節）

彼にとってこの杖はそれまでのようなただの羊飼いの杖ではなく、神様がともにいてくださるしるしとして、イスラエルの民を率いて行くためになくてはならない大切な杖となったのです。

神の杖によってなされた大いなるわざ

神様が仰せになったように、モーセはそれから後、この神の杖によって数々の力あるわ

ざを現わしましたが、そのうちのもっとも大いなるわざは何と言ってもイスラエルの民が紅海を渡ったときの出来事でありましょう。

モーセはイスラエルの民を率いてエジプトを脱出し、紅海（聖書では葦の海）のほとりまで来ましたが、そのときパロに率いられたエジプトの大軍が彼らを追跡して来るのが見えました。イスラエルの民は恐怖の叫びを上げましたが、神様はモーセに次のように仰せになったのです。

なぜあなたはわたしに向かって叫ぶのか。イスラエル人に前進するように言え。あなたは、あなたの杖を上げ、あなたの手を海の上に差し伸ばし、海を分けて、イスラエル人が海の真中のかわいた地を進み行くようにせよ。見よ。わたしはエジプト人の心をかたくなにする。彼らがそのあとからはいって来ると、わたしはパロとその全軍勢、戦車と騎兵を通して、わたしの栄光を現わそう。

（出エジプト記14章15～17節）

神様に言われたようにモーセが杖を上げ、手を差し伸ばすと海は分かれてイスラエルの民は海の真中の乾いた地を渡りきり、その後を追いかけてきたエジプト全軍が海の中に入ったとき、神様はモーセにもう一度手を海の上に差し伸べ、水がエジプト軍の上に返る

ようにせよとお命じになりました。モーセがその通りすると水はもとに戻りエジプト全軍は溺れ死にました。出エジプト記には次のように記してあります。

イスラエルは主がエジプトに行なわれたこの大いなる御力を見たので、民は主を恐れ、主とそのしもべモーセを信じた。

（出エジプト記14章31節）

このように、神様は一方的にモーセをイスラエルの指導者としてお選びになり、モーセの手にお与えになった神の杖によってご自身のご栄光をお現わしになったのです。

モーセの犯した過ち

ところがモーセは神の杖を使って何度となく大いなるわざを現わすうちに、とうとう、その力を神様の栄光に帰するのではなく、自分の栄光に帰するという大きな過ちを犯してしまったのです。それは次のようなことでした。イスラエルの民は旅を続けてツィンの荒野についたとき、喉を潤す飲み水が見つからず、そのためにモーセとアロンに次のように逆らいました。

なぜ、あなたがたは主の集会をこの荒野に引き入れて、私たちと、私たちの家畜

をここで死なせようとするのか。なぜ、あなたがたは私たちをエジプトから上らせて、この悪いところに引き入れたのか。ここは穀物も、いちじくも、ぶどうも、ざくろも育つような所ではない。そのうえ、飲み水さえない。

（民数記20章4～5節）

モーセとアロンは神様に祈りました。すると神様はモーセに告げられました。

杖を取れ。あなたとあなたの兄弟アロンは、会衆を集めよ。あなたがたが彼らの目の前で岩に命じれば、岩は水を出す。あなたは、彼らのために岩から水を出し、会衆とその家畜に飲ませよ。

（民数記20章8節）

モーセとアロンはどうしたでしょうか。

モーセとアロンは岩の前に集会を召集して、彼らに言った。「逆らう者たちよ。さあ、聞け。この岩から私たちがあなたがたのために水を出さなければならないのか。」モーセは手を上げ、彼の杖で岩を二度打った。すると、たくさんの水がわき出たので、会衆もその家畜も飲んだ。

（民数記20章10～11節）

しかし、そのとき神様はモーセとアロンに次のように仰せになったのです。

あなたがたはわたしを信ぜず、わたしをイスラエルの人々の前に聖なる者としなかった。それゆえ、あなたがたは、この集会を、わたしが彼らに与えた地に導き入れることはできない。

（民数記20章12節）

ここでモーセは大きな過ちを犯したのです。一つは10節の「この岩から私たちがあなたがたのために水を出さなければならないのか」という言葉に表されているように、彼はこのときあたかも自分の力で水を出すかのように高慢にふるまったことであります。二つ目は岩を一度ではなく二度も打ったことであります。二度も打ったということは神様が「わたしを信ぜず」と仰せになったように、神様の力を信じなかったために取った行動でありました。三つ目は神様が「わたしをイスラエルの人々の前に聖なる者としなかった」と仰せになったように、この力あるしるしを自らの栄光に帰し、神様にご栄光を帰さなかったことであります。この過ちによって、モーセとアロンは神様が仰せになったとおり、目的の地カナンを目の前にしながら入ることができなかったのであります。

キリスト者に与えられた神の杖

さて、モーセと神様が与えられた杖との関係は、イエス様を信じてこの世に属する者から神に属する者、イエス様のものとされたキリスト者にも当てはまることであります。というのはキリスト者にも神様は神の杖をお与えになっているからであります。ではキリスト者に与えられた神の杖とはいったい何でありましょうか。キリスト者に与えられた「わたしはあなたとともにいる」というしるしは何でありましょうか。それは神様からキリスト者に与えられた霊的な力であります。パウロは次のように言っています。

神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができますように。

（エペソ人への手紙1章19節）

どうか、私たちのうちに働く力によって、私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施すことのできる方に、教会により、またキリスト・イエスにより、栄光が、世々にわたって、とこしえまでありますように。アーメン。

（エペソ人への手紙3章20～21節）

私たちは、このキリストを宣べ伝え、知恵を尽くして、あらゆる人を戒め、あらゆる人を教えています。それは、すべての人をキリストにある成人として立たせるためです。このために、私もまた、自分のうちに力強く働くキリストの力によって、労苦しながら奮闘しています。

（コロサイ人への手紙1章28～29節）

キリスト者に与えられる神の杖、「わたしはあなたとともにいる」というしるしは、ここに記されているようにキリスト者の霊に働くキリストの御霊の力であります。

ではその力をキリスト者がどのように使うことを神様は、イエス様は望んでおられるのでしょうか。それはキリスト者が神の杖であるイエス様の御霊の力に頼って、神に属する者、イエス様に属する者にふさわしく生きることであります。そしてそのように生きることを通して、神様やイエス様のご栄光が現わされることなのであります。しかし、イエス様を信じる私たちは果たして与えられている神の杖をこのように使っているのでありましょうか。そうでなく、神の杖を与えられていることも忘れて、相変わらず自分の力や知恵に頼って生きているのではないでしょうか。ここで改めて自分を顧みることが大切であります。

キリスト者は神の杖によってイエス・キリストを証しする

また神様、イエス様はキリスト者が神の杖によってイエス様を証しすることを望んでおられます。復活されたイエス様が天に戻られる前に、弟子たちに次のようにおっしゃいました。

聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。

（使徒の働き1章8節）

このようにイエス様は、キリスト者に与えられた神の杖であるイエス様の御霊の力によって、ご自分を証しするようにとお命じになっているのです。パウロはこれについて次のように言っています。

主は、私とともに立ち、私に力を与えてくださいました。それは、私を通してみことばが余すところなく宣べ伝えられ、すべての国の人々がみことばを聞くようになるためでした。

（テモテへの手紙第二4章17節）

しかし、イエス様を証しすることがどうして神の杖である御霊の力によるのでありましょうか。それは使徒の働きの中に詳しく記されている、イエス様の仰せに従ってイエス様を証しし、イエス様を宣べ伝えたペテロやヨハネ、ステパノ、ピリポ、パウロらの数々の成果を見れば明らかであります。彼らは自分の力や知恵でイエス様を証しし、宣べ伝えたのではありませんでした。もしそうであれば、決して多くの人々がイエス様を信じ、救い主として受け入れることはなかったでしょう。パウロはコリント人への手紙第一の中で次のように証ししています。

さて兄弟たち、私があなたがたのところへ行ったとき、私は、すぐれたことば、すぐれた知恵を用いて、神のあかしを宣べ伝えることはしませんでした。なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方のほかは、何も知らないことに決心したからです。あなたがたといっしょにいたときの私は、弱く、恐れおののいていました。そして、私のことばと私の宣教とは、説得力のある知恵のことばによって行われたものではなく、御霊と御力の現われでした。

（コリント人への手紙第一2章1～4節）

キリスト者に与えられた神の杖は、砕かれたときに働く

このパウロの証しにあるように、キリスト者に与えられた神の杖である御霊の力は自分の無力を知り、自分が心砕かれたときにはじめて現われます。イエス様がパウロに、

主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」

（コリント人への手紙第二12章9節）

と言われたとおりであります。イエス様のみこころを知ったパウロは、

ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。

（コリント人への手紙第二12章9節）

と自我を砕くために弱さを与えてくださったイエス様に感謝したのです。

私たちはモーセよりもパウロよりもはるかに自我が強くまた愚かな者です。にもかかわらず神様が一方的に私たちに目を留めてくださり、十字架の贖いを信じる信仰によって新しく生まれ変わり、イエス様に属する者としてくださいました。そして相変わらずまだ自

我が強くて愚かな私たちにもモーセやヨハネやペテロやパウロたちと同じように神の杖である御霊を与えてくださって、その力によってイエス様を証しし、またご自分のご栄光を現わそうとされているのです。

けれども私たちが注意しなければならないことがあります。私たちは岩のように堅い心を持った方が砕かれてイエス様を信じられるのは、まさに奇蹟であって、それは御霊が働かれた結果であり、とうてい自分の努力では成し得ないことをよく知っているはずであります。にもかかわらず、そのような堅い心を持った方にイエス様をお伝えしているうちに、岩のような心が次第に砕かれて、ついにその心の中からいのちの水がわき出るのを見たときに、私たちは神の杖である御霊の力の働きによってひとりの尊いいのちが救われたことをつい忘れ、傲慢にも自分の努力でその方を救いに導くことができたと思ってしまうことがありはしないでしょうか。もしそのように思うならば、モーセが自分の力で岩から水を出したと考えたのと同じような過ちを犯していることになり、それは自分を誇ることになり、主にではなく、自分に栄光を帰していることになるのです。

これまでごいっしょにモーセに与えられた神の杖について聖書から考えて来ましたが、このことはただ愛とあわれみによって神様に一方的に選ばれてイエス様を信じ、永遠のい

のちと天国の国籍を与えられるという大きな恵みに与かった私たちが、イエス様に従う者としてどのように生きていくべきかという大切な問題について、深い示唆を与えていると思います。すなわち、このことは、救われた私たち一人ひとりが、単に救われた者として生きることにとどまらず、主から与えられた神の杖に頼って生きるように、そしてまだ救われていない方々に神の杖によってイエス様を伝えながら生きるようにと、主が示してくださっているのではないでしょうか。

主のご再臨が間近に迫っている今の時、神様が私たちのような弱く愚かな者にも「わたしはあなたとともにいる。これがあなたのためのしるしである」と仰せになり、そのしるしとして神の杖であるイエス様の御霊の力をお与えくださって、ご自身のご栄光を現わそうと望んでおられることを深く心に刻みたいと思います。そして自らに栄光を帰することなく、ただ主にのみご栄光が帰されることだけを自分の喜びとして、授けられた神の杖である御霊の満たしと導きを求めながら日々主に従って歩むことができれば、この上ない幸いであろうと確信いたします。

六　「眠りからさめるべき時刻がもう来ている」

あなたがたは、今がどのような時か知っているのですから、このように行ないなさい。あなたがたが眠りからさめるべき時刻がもう来ています。というのは、私たちが信じたころよりも、今は救いが私たちにもっと近づいているからです。

（ローマ人への手紙13章11節）

今日はこのみことばから、私たちキリスト者にとって今はどんな時であるかをごいっしょに考えたいと思います。

パウロはここでローマにいるイエス様を信じる人々に「あなたがたは、今がどのような時か知っているのですから」と言っています。しかし、これは現在のキリスト者に対して言われていることでもあるのです。では、私たちキリスト者は今がどのような時か知っているでしょうか。さらに一歩進んで、どのような時かを私たちははっきり自覚しているでありましょうか。

今の時は救いの完成が間近な時

今はどのような時か、それはパウロが言っているように、私たちキリスト者が霊的な眠りから覚めるべき時であり、その理由は「今は救いが私たちにもっと近づいているから」なのであります。けれども「今は救いがもっと近づいている」というのはどういうことでしょうか。イエス様の救いのみわざは、人としてこの世においでになった神の御子イエス様が二千年前に十字架に架かってくださり、三日後に復活されたことによって、すでに完成したのではないのか、それなのに救いが近づいているというのはどういうわけなのだろうと思う方もおありでしょう。しかし、救いのみわざは十字架と復活だけによって完成するのではないのです。イエス様による救いは十字架の贖いに始まり、復活を経て、ご再臨によって完成するのであり、その救いの完成の時、すなわちご再臨の時が間近に迫っているとパウロは言っているのであります。これについてはヘブル人への手紙に、

キリストも、多くの人の罪を負うために一度、ご自身をささげられましたが、二度目は、罪を負うためではなく、彼を待ち望んでいる人々の救いのために来られるのです。

（ヘブル人への手紙9章28節）

と書かれています。神の御子イエス様は一度目には私たち人間を神様に対する背きの罪から救い出すため、私たちの罪を身代わりに負って十字架の上で死んでくださるために、すでに二千年前にこの世に人としておいでになりました。そして、この考えられないような恵みが自分のためであったと信じ、イエス様を自分の救い主として受け入れた人々には神の子としての身分が与えられ、信じた瞬間にその人の霊は完全に聖いものに変えられるのです。

しかし、イエス様を信じた者も、パウロがローマ人への手紙七章一八～一九節で、

私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善（主に従うこと）が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。

と言っているように、私たちはこの世に生きている間は肉体のほうはまだ不完全な、朽ちるからだのままであるために、生まれ変わった霊はイエス様に従いたいと思っても、肉の要求に負けて罪を犯してしまうのであります。

そして先ほどのみことばに、「二度目は、罪を負うためではなく、彼を待ち望んでいる

人々の救いのため」とありますように、今度イエス様はイエス様を信じる者の罪を犯しやすい、不完全な朽ちるからだを、聖い朽ちないからだ（イエス様と同じ完全な聖いからだ）によみがえらせるために、すなわち救いのみわざを完成させるために再び来てくださるのです。こうしてキリスト者は霊、肉ともに完全にされ、イエス様の救いのみわざは完成するのであります。パウロはキリスト者のからだのよみがえりについて、コリントの教会の信者に宛てた手紙で次のように言っています。

聞きなさい。私は（イエス様を信じる）あなたがたに（信者の復活の）奥義を告げましょう。私たちはみなが眠って（死んで）しまうのではなく、みな（朽ちない、聖いからだに）変えられるのです。終わりの（世の終わりを告げる合図の）ラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、（イエス様を信じてすでに死んだ）死者（のからだ）は朽ちないもの（からだ）によみがえり、（そのときまで生きていた）私たち（キリスト者）は（朽ちないからだに）変えられるのです。

（コリント人への手紙第一15章51～52節）

死者の復活、すなわちからだのよみがえりは人間の知恵ではとうてい考えられないこと

ですが、イエス様はご自分の復活を通して信じる者にそれが確かなことであると証ししてくださったのであります。今お読みしたコリント人への手紙第一の箇所の少し前の一九～二四節でパウロは、

もし、私たち（キリスト者）がこの世にあってキリストに単なる希望を置いているだけなら、私たちは、すべての人の中で一番哀れな者です。しかし、今やキリストは、眠った者の初穂（死んだキリスト者がよみがえるときの象徴）として死者の中からよみがえられました。というのは、死がひとりの人を通して来たように、死者の復活もひとりの人を通して来たからです。すなわち、アダムにあって（アダムの罪を受け継いだ）すべての人が死んでいるように、キリストによってすべての人が（キリストを信じたすべての人がキリストの復活と同じように）生かされるからです。しかし、おのおのにその順番があります。まず初穂であるキリスト、次にキリストの再臨のときキリストに属している者（キリスト者）です。それから終わりが来ます。

（コリント人への手紙第一15章19～24節）

と言っています。キリスト者がイエス様を信じる者に与えられた神の御霊によって、完全

なからだのよみがえりを確信できるのは何という幸いなことでありましょうか。今はその時が近いのです。そういうわけで私たちキリスト者はイエス様のご再臨が間近いことを大いに喜び、その日、その時の来ることを心から待ち望んでいるのです。

今の時は惑わしの時

しかし、私たちはただ喜んでばかりもいられません。ペテロは初代教会の信者に宛てた手紙に次のように書いています。

あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており、終わりのときに現わされるように用意されている救い（からだのよみがえり）をいただくのです。そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいます。いまは、しばらくの間、さまざまの試練の中で、悲しまなければならないのですが、信仰の試練は、火を通して精練されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエス・キリストの現われのときに称賛と光栄と栄誉に至るものであることがわかります。

（ペテロの手紙第一1章5～7節）

ペテロが「あなたがたは、今は、しばらくの間、さまざまの試練の中で、悲しまなけれ

ばならない」と言っているように、キリスト者にとって今の時は主のご再臨を待ち望む希望の時であると同時に、信仰の試練の時でもあるのです。というのは世の終わりが近いのを知っているサタンはさまざまな方法を使ってキリスト者を主から引き離そうと惑わし、また迫害するからであります。

ではこの終わりの時に、キリスト者はどのような心構えで日々の生活を過ごしたらよいのでしょうか。それにはパウロが冒頭の手紙の箇所で「あなたがたが眠りから覚めるべき時刻がもう来ています」と言っているように、まず私たちキリスト者は今こそ霊的な眠りから目を覚ます時であるというはっきりとした自覚を持つことが必要であります。霊が眠っていればこの世に現われて来る終わりの前兆である様々な現象も見落としてしまうからです。私がここで申し上げるまでもなく、昨年九月のアフガン・イスラム過激派によるニューヨークとワシントンの同時多発テロに始まった全世界を巻き込むような出来事は、私たちキリスト者にイエス様のご再臨がほんとうに間近いことをはっきりと知らしめるものでありました。マルコの福音書一三章二八～二九節でイエス様は次のようにおっしゃっています。

いちじくの木から、たとえを学びなさい。枝が柔らかになって、葉が出て来ると、

夏の近いことがわかります。そのように、これらのことが起こるのを見たら、人の子（イエス様）が戸口まで近づいていると知りなさい。

いちじくの木とはイスラエルを指しています。この紛争の根には、一九四八年のイスラエル国家再建の時からのイスラエルとパレスチナとの争い、さらにはイスラエル民族とアラブ民族との争い、また別の言い方をしますとイスラエルとイスラム諸国との争い、憎しみ合いがきわめて深く存在しています。昨年来の紛争は表面的にはアフガンのテロ組織とアメリカとの戦いのように見えますが、イスラム諸国の過激派のほんとうの敵はイスラエルとその支持国なのであります。このようにイスラエル国家にかかわる紛争が全世界の人々の目の前に明らかに起こって来たこと、すなわちいちじくの葉が出て来た今こそ、イエス様が戸口まで近づいていらっしゃることを霊の目の覚めているキリスト者は知るのであります。しかし、キリスト者であっても、もし霊が眠っていればこのようなはっきりとしたイエス様から出される終末の時のサインも見逃してしまいます。霊が眠っていては主のみこころもわからないばかりか、サタンの惑わしにかかり、しかも眠っている自分の霊的な状態も自分ではまったく気がつかないという恐ろしい状態に陥ってしまいます。私たちキリスト者の霊の目がはっきり目覚めているときにだけ、キリスト者として具体的に今

はどのような時なのか、そしてこのような終末の時にいかにして日々生きるべきかを、主の御霊が示してくださり、導いてくださるのです。

今の時は光の武具を身に着け、サタンと戦う時

今の時のキリスト者の生き方について、パウロは冒頭の手紙の「今がどのような時か知っているのですから、このように行ないなさい」と言う言葉に続けて次のように書いています。

夜はふけて、昼が近づきました。ですから、私たちは、やみのわざを打ち捨てて、光の武具を着けようではありませんか。遊興、酩酊、淫乱、好色、争い、ねたみの生活ではなく、昼間らしい、正しい生き方をしようではありませんか。主イエス・キリストを着なさい。肉の欲のために心を用いてはいけません。

（ローマ人への手紙13章12～14節）

この世に罪と悪に満ちた夜の闇がますます濃くなっていることは、私たちが毎日の生活の中で、とくに新聞やテレビのニュースを通して痛感するところであります。しかしそれはまた、光であるイエス様のご再臨が近づいている証拠でもあります。そのことを私たち

キリスト者は目覚めた霊によってのみ知ることができます。私たちキリスト者はこの世の人々と同じように日に日に混乱を深めているこの世に無感覚になることなく、またサタンの支配下にあるこの世に心を惑わされて罪の生活に妥協することなく、そこからはっきり訣別して、光の武具をしっかりと身に着けて主に従う正しい生活をしなければなりません。これが今の時に主がキリスト者に求めておられることなのであります。

では光の武具とはどんな武具でしょうか。パウロはエペソの教会の信者に宛てた手紙で次のように言っています。

腰には真理の帯を締め、胸には正義の胸当てを着け、足には平和の福音の備えをはきなさい。これらすべてのものの上に、信仰の大盾を取りなさい。それによって、悪い者が放つ火矢を、みな消すことができます。救いのかぶとをかぶり、また御霊の与える剣である、神のことばを受け取りなさい。すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目をさましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。

（エペソ人への手紙6章14～18節）

神様の真理という帯、神様の正しさである正義という胸当て、神様との和解を伝える福

音の靴、主に信頼しておゆだねする信仰の大盾、御霊の剣である神様のみことば、これが光の武具であります。何とこの世の武具とは異なるでしょうか。しかし、私たちが今の時にあってサタンやサタンに支配されて神様に反抗している者と戦って勝利するには、この光の武具こそが必要なのであります。私たちキリスト者はこの武具をしっかり身に着け、その上で絶えず霊の目を覚まして御霊によって祈るとき、サタンの攻撃に必ず打ち勝つことができるのです。

またパウロがテサロニケの信者に宛てた手紙にも、今の時にキリスト者のなすべきことが次のように書かれています。

兄弟たち。それらがいつなのか、またどういう時かについては、あなたがたは私たちに書いてもらう必要がありません。主の日（イエス・キリストのご再臨と、さばきを含む世の終わりの時）が夜中の盗人のように来るということは、あなたがた自身がよく承知しているからです。人々が「平和だ。安全だ。」と言っているそのようなときに、突如として滅びが彼ら（神様を拒み続けた者）に襲いかかります。ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むようなもので、それをのがれることは決してできません。しかし、兄弟たち。あなたがたは暗やみ（神様に背いている霊的な暗や

みの状態）の中にはいないのですから、その日が、盗人のようにあなたがたを襲うことはありません。あなたがたはみな、（イエス・キリストを信じる信仰によって生まれ変わった）光の子ども、昼の子どもだからです。私たちは、夜や暗やみの者ではありません。ですから、ほかの（この世の）人々のように（霊が）眠っていないで、（霊の）目をさまして、慎み深くしていましょう。眠る者は夜眠り、酔う者は夜酔うからです。しかし、私たち（キリスト者）は昼の者なので、信仰と愛を胸当てとして着け、救いの望みをかぶととしてかぶって、慎み深くしていましょう。

（テサロニケ人への手紙第一5章1～8節）

ここでもキリスト者はイエス様のご再臨の日に備えて、その日がいつ来てもよいように、この世の人々のように霊的に眠っていないで、神様からいただいた光の武具を身に着け、しっかりと霊の目を覚まして、慎み深くしていることが必要であると言っています。

今の時は恵みの時、救いの日

ここまでは主にイエス様を信じている者、すなわちキリスト者にとって今がどのように大切な時であるかについて考えて来ました。ではまだイエス様を信じておられない方々に

とって、今はどのような時なのでありましょうか。イエス様をまだ信じていない方々にとって、今の時は恵みの時なのであります。どうしてでしょうか。サタンの支配下にあって神様を恐れず、神様に反抗する人々は、イエス様のご再臨を待ち望んでいるキリスト者をあざ笑い、そんなことは起こらないと言ってキリスト者の信仰をあざけります。このことは終わりの日が近いという証拠であるとペテロは初代教会の信者に宛てた手紙で次のように言っています。

まず第一に、次のことを知っておきなさい。終わりの日に、あざける者どもがやって来てあざけり、自分たちの欲望に従って生活し、次のように言うでしょう。「キリストの来臨の約束はどこにあるのか。（旧約時代のユダヤ人の）先祖たちが眠った（死んだ）時からこのかた、何事も創造の初めからのままではないか。」こう言い張る彼らは、次のことを見落としています。すなわち、天は古い昔からあり、地は神のことばによって水から出て、水によって成ったのであって、当時の世界は、その水により、洪水におおわれて滅びました。しかし、今の天と地は、同じみことばによって、火に焼かれるためにとっておかれ、不敬虔な者どものさばきと滅びとの日まで、保たれているのです。しかし、愛する人たち。あなたがたは、この一事

を見落としてはいけません。すなわち、主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです。主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。

（ペテロの手紙第二3章3～9節）

神の御子イエス様は義そのものの正しい方であり、また真実な方ですから、決して約束を違えることはなさいません。ですから最後まで神様を拒み続ける不敬虔な人々は、お約束どおり必ず世の終わりの日にイエス様によってさばかれ、永遠の滅びに入れられます。しかしイエス様はさばきの日を今日まで延ばしておられるのです。そのわけはペテロが言っているように、「ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられる」からです。イエス様は一人でも多くの人に救いの機会を与えようと大きなあわれみとご愛により忍耐をもって、神様に背を向けて自分勝手な道を歩んでいる者が心砕かれてご自分の前に罪を悔い改めて来るのを待っていてくださるからであります。ペテロが初代教会の信者に宛てた手紙で、

私たちの主の忍耐は救いであると考えなさい。

（ペテロの手紙第二3章15節）

と言っているとおりであります。何というイエス様の深いあわれみでありましょうか。その意味で、まさに今の時はまだイエス様を信じていない方々にとって、パウロがコリントの教会への手紙に書いているとおり、

確かに、今は恵みの時、今は救いの日です。

（コリント人への手紙第二6章2節）

なのであります。そしてこのみことばは、神様からの愛とあわれみに満ちた警告にほかなりません。

しかしながら、イエス様はいつまでもさばきの時を延ばして待っていてくださるでしょうか。そうではないのです。前にお読みしたマタイの福音書二四章一四節で、イエス様は「この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかしされ、それから、終わりの日が来ます」とおっしゃいました。今は神の国の福音は各国の言葉に訳された聖書を通して、また御霊の力に助けられたキリスト者の伝道を通して、すでに世界中に宣べ伝えられたと言ってよいでありましょう。ですからご再臨はいつあっても不思議ではありま

せん。どうかまだイエス様を信じておられない方は、忍耐をもってみもとに来るようにと待っておられるイエス様の大きな恵みとあわれみのこの時を無駄になさることのないように、世の終わりが間近に迫っている今の時に心を開いてイエス様の十字架による救いのみわざが自分のためであったことを心から信じ、一日も早くイエス様を救い主として受け入れていただきたいと心から切に祈る次第です。またすでに救われた私たちキリスト者は、世の終わりの今の時に霊の目をはっきりと覚まして、イエス様の兵士として、イエス様に従い、光の武具をしっかりと身に着け、サタンの支配下にある人々を火の中から救い出す戦いを闘い抜くことができるように、日々さらなる御霊の満たしを祈り求める者でありたいと切に願う次第であります。

七　「あなたがたの現状をよく考えよ」

預言者ハガイを通して、次のような主のことばがあった。「この宮が廃墟となっているのに、あなたがただけが板張りの家に住むべき時であろうか。今、万軍の主はこう仰せられる。あなたがたの現状をよく考えよ。あなたがたは、多くの種を蒔いたが少ししか取り入れず、食べたが飽き足らず、飲んだが酔えず、着物を着たが暖まらない。かせぐ者がかせいでも、穴のあいた袋に入れるだけだ。万軍の主はこう仰せられる。あなたがたの現状をよく考えよ。山に登り、木を運んで来て、宮を建てよ。そうすれば、わたしはそれを喜び、わたしの栄光を現わそう。主は仰せられる。あなたがたは多くを期待したが、見よ。わずかであった。あなたがたが家に持ち帰ったとき、わたしはそれを吹き飛ばした。それはなぜか。……万軍の主の御告げ。……それは、廃墟となったわたしの宮のためだ。あなたがたがみな、自分の家のために走り回っていたからだ。」

（ハガイ書1章3～9節）

今日は聖書のこの箇所から、恵みによって神の民とされた者は、何を優先順位の第一として生きるべきかということについて、ごいっしょに考えてみたいと思います。

紀元前五三九年、主なる神様はペルシャのクロス王を用いて、栄華を誇っていたバビロニヤ帝国を滅ぼし、バビロニヤに征服され捕虜として首都バビロンに移住させられていたイスラエルの民は解放され、七十七年ぶりに故国に帰還することができたのです。故国に帰った彼らが、神の民としてまず最初になすべきことは、主なる神様に対する感謝の証しとして、バビロニヤによって破壊され、荒廃した神殿を再建することでした。しかし、さまざまな妨げに会って工事が遅々として進まないうちに、イスラエルの民の気持は変わってしまいました。すなわち信仰に基づく故国再建という意識は失せ、神殿の再建によって自分たちの信仰を神様に証ししようとすることに無関心となり、それよりもまず板造りの立派な自分の家を建てようという、自分のこと、地上のことを第一にする自己中心的な生活に戻ってしまったのです。このようなときに、イスラエルの民に対して神様が預言者ハガイを通して仰せられたのが冒頭のみことばであります。

神様はこう仰せになったのです。「わたしの住まいが荒れ果てたままなのに、あなたが

ただけがぜいたくな家に住むべき時なのだろうか。その結果はどうか。あなたがたの現状をよく考えて見なさい。いくら種を蒔いても、ほんのわずかしか収穫がなく、飲食にも事欠き、寒さを防ぐ衣服さえもない有様ではないか。収入はまるで底の抜けた財布に入れるように、すぐなくなってしまうではないか。自分たちがどんなことをして来たか、またその結果どうなったかをよく考えなさい。さあ、山に登り、材木を切り出し、わたしの住まいを再建しなさい。わたしは喜んで受け入れ、わたしの栄光をそこに現わそう。あなたがたは多くを望んでも、少ししか得られない。それを家に持ち帰っても、わたしが吹き飛ばすからなくなってしまう。どうしてか、それはわたしの住まいが廃墟のままなのに、あなたがたは心にもかけず、自分の家をよくすることばかり考えているからだ」。

捕囚から解放された故国に帰還したイスラエルの民が第一になすべきこと

イスラエルの民は神様の一方的な恵みによって神の民として選ばれた人々であります。この恵みに応えてイスラエルの民は礼拝と生活のすべてにおいて神様にご栄光を帰し、神様の戒めを守って心から神様に従うことが求められていました。しかし彼らはたびたび主なる神様に背き、そのたびに厳しい懲らしめを受けました。イスラエルがバビロニヤに征

服され、彼らが捕虜として都バビロンに連れて行かれ、異国で七十七年もの間苦難の生活を送らなければならなかったのも、主なる神様に背き、神様の戒めを破った結果でありました。しかし恵み深い神様は、バビロンでの長い囚われの年月の間にもエレミヤやエゼキエルなどの預言者をお用いになって、イスラエルの民に悔い改めを求められ、ようやく彼らは長い間の囚われから解放され故国に帰ることが許されたのです。故国に帰還したイスラエルの民のなすべきことは、主なる神様に感謝し、廃墟になった神殿をまず再建するという行為によって、自分たちの信仰が立て直されたのを証しすることでした。しかし今述べたように彼らの決心はすぐに挫折して、主なる神様を第一とするのではなく、自分のこと、地上のことを第一とするという生き方に戻ってしまったのです。

主を第一とせず自分を第一とするキリスト者

けれども、このイスラエルの民の行動は、主イエス様の一方的な愛とあわれみによって罪を贖われた私たちキリスト者にも当てはまるのではないでしょうか。パウロはピリピの教会の信者に宛てた手紙に、

だれもみな自分自身のことを求めるだけで、キリスト・イエスのことを求めては

いません。

（ピリピ人への手紙2章21節）

と書いていますが、これはまさに自分に対して言われている言葉のようで、心を刺される思いがします。私たちはイエス様のご愛とあわれみによって、主の尊いいのちを代価として、長い間囚われていた罪の捕虜から解放され、神の民として、神の子どもとして新しく生まれ変わった者であります。そして私たちは、この主の恵みに心から感謝し、信じてからはイエス様にお仕えして、イエス様のみこころに従うことを第一とすることこそが主のご愛にお応えする唯一の証しであると決心したのではなかったでしょうか。にもかかわらず、信じてから時が経つにつれてその熱い感謝の思いが次第に薄れていって、イエス様にお仕えするよりも自分の肉に、自我に仕えることを第一として生活するように変わってしまったのではないでしょうか。

まず神の国と神の義とを第一に求めよ

イエス様はご自分を主と信じて従って行きたいと思っている者は、どのような心構えで生きなければならないかを、たとえによってわかりやすく教えてくださいました。

だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。だから、わたしはあなたがたに言います。自分のいのちのことで、何を食べようか、何を飲もうかと心配したり、また、からだのことで、何を着ようかと心配したりしてはいけません。いのちは食べ物よりたいせつなもの、からだは着物よりたいせつなものではありませんか。空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養っていてくださるのです。あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれたものではありませんか。あなたがたのうちだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。なぜ着物のことで心配するのですか。野のゆりがどうして育つのか、よくわきまえなさい。働きもせず、紡ぎもしません。しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。きょうあっても、あすは炉に投げ込まれる野の草さえ、神はこれほどに装ってくださるのだから、ましてあなたがたに、よくしてくださらないわけがありましょうか。信仰の薄い人た

ち。そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。こういうものはみな、異邦人（まことの神様を信じない人々）が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。だから、神の国（神のご支配）とその義（神に従うこと）とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。

（マタイの福音書6章24～33節）

イエス様はこのように、「もしわたしに従って行きたいと思うなら、まずわたしにゆだね、わたしに信頼することを第一にして生活しなさい」と命じておられます。そして、私たちが自分をイエス様に明け渡して、ただイエス様に従って歩めば、豊かに祝福しようと約束してくださっているのです。しかし私たちは果たしてイエス様に従うことを第一にして一心にイエス様について行っているでしょうか。先ほども申したとおり、それがなかなかできないことは自分自身が一番よく承知しているのではないでしょうか。イエス様に従うと口では言いながらも、その決心が鈍ってしまった人々の例がルカの福音書に出ています。

さて、彼ら（イエス様と弟子たち）が道を進んで行くと、ある人がイエスに言った。「私はあなたのおいでになる所なら、どこにでもついて行きます。」すると、イエスは彼に言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巣があるが、人の子（イエス様）には枕する所もありません。」イエスは別の人に、こう言われた。「わたしについて来なさい。」しかしその人は言った。「まず行って、私の父を葬ることを許してください。」すると彼に言われた。「死人たちに彼らの中の死人たちを葬らせなさい。あなたは出て行って、神の国を言い広めなさい。」別の人はこう言った。「主よ。あなたに従います。ただその前に、家の者にいとまごいに帰らせてください。」するとイエスは彼に言われた。「だれでも、手を鋤につけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくありません。」

（ルカの福音書9章57～62節）

ここに記されている三人の人は、それぞれ理由は異なっていても、みなイエス様よりも自分のこと、地上のことを優先しています。「イエス様がおいでになるところなら、どこにでもついて行きます」と断言した人は、イエス様に「わたしはこの地上には寝るところもないけれども、それでもわたしについて来ますか」と言われてどうしたでしょうか。そ

れでも彼はイエス様について行ったでしょうか。もう一人は父親の葬儀を優先したいと言って尻込みしました。また三番目の人は、家族との別れを優先したいと言いました。イエス様に救っていただいた私たちも、もしこの三人のように自分のこと、地上のことをイエス様よりも優先するような態度を取るのであれば、イエス様は私たちに対しても「あなたがたは神の国にふさわしくない」とおっしゃるのです。

いっぽうこれと対照的な態度を取った者がいます。それはイエス様によって召し出された時のシモン（ペテロ）、アンデレ、ヤコブ、ヨハネの取った態度でした。

ガリラヤ湖のほとりを通られると、シモンとシモンの兄弟アンデレが湖で網を打っているのをご覧になった。彼らは漁師であった。イエスは彼らに言われた。「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしてあげよう。」すると、すぐに、彼らは網を捨て置いて従った。また少し行かれると、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネをご覧になった。彼らも舟の中で網を繕っていた。すぐに、イエスがお呼びになった。すると彼らは父ゼベダイを雇い人たちといっしょに舟に残して、イエスについて行った。

（マルコの福音書1章16～20節）

イエス様に声をかけられた彼らは、イエス様がどんな方か知らず、またイエス様が「人を取る漁師にしてあげよう」とおっしゃった意味がどんなことか理解できなかったにもかかわらず、すなおにイエス様の御声に聞き従い、ただちに仕事を捨て、親を残してその場からイエス様に従って行きました。それはイエス様が神の御子としての権威を持っておられる方であることが、誇るべきものは何一つ持っていない心貧しい彼らには直観的にわかったからであります。彼らはそれからはイエス様の忠実な弟子として、ずっとイエス様と寝食を共にしながら付き従い、イエス様が十字架の死を遂げられてからも、御霊によって力を与えられて、イエス様こそすべての人間を罪から救い出してくださるために人となられて十字架に架かり、よみがえられた救い主であるという福音を、迫害されてもひるむことなく宣べ伝え続けたのであります。

パウロは愛する同労者テモテに宛てた手紙の中でキリスト者を兵士にたとえて次のように言っています。

キリスト・イエスのりっぱな兵士として、私と苦しみをともにしてください。兵役についていながら、日常生活のことに掛かり合っている者はだれもありません。それは徴募した者（私たちを主の兵士として召してくださったイエス様）を喜ばせ

るためです。

（テモテへの手紙第二2章3～4節）

イエス様を信じる私たちも、イエス様に招集された兵士として、自分のこと、地上のことを顧みずにイエス様に従って信仰の戦いを進めて行き、イエス様に喜んでいただきたいと心から思います。

主イエスよりも自分を第一にするキリスト者の結果

しかし、もしイエス様の十字架の血によって罪の汚れが聖められた者が、イエス様よりも自分のこと、地上のことを第一とすれば、その結果はどうなるでしょうか。これについてイエス様は次のようにおっしゃっています。

汚れた霊（主なる神に反逆して人間を神様から引き離そうと働く霊）が人から出て行って、水のない地をさまよいながら休み場を捜しますが、見つかりません。そこで、「出て来た自分の家に帰ろう。」と言って、帰って見ると、家はあいていて、掃除してきちんとかたづいていました。そこで、出かけて行って、自分よりも悪いほかの霊を七つ連れて来て、みなはいり込んでそこに住みつくのです。そうなると、

その人の後の状態は、初めよりもさらに悪くなります。邪悪なこの時代もまた、そういうことになるのです。

（マタイの福音書12章43～45節）

イエス様はかつてサタンに支配され、サタンを入れていた器である私たちからサタンを追い出し、ご自分の尊い血潮で汚れた器を聖めてくださいました。それは聖められた器を御霊を入れる器としてお用いになるためであります。しかし、せっかく聖められた器も器の口をイエス様にしっかり向けていないと、きれいになった器にまたサタンが喜んで住みついてしまい、聖められた器は再びサタンによって汚されてしまうのです。このようなキリスト者についてペテロは初代教会の信者に宛てた手紙で次のように言っています。

主であり救い主であるイエス・キリストを知ることによって世の汚れからのがれ、その後再びそれに巻き込まれて征服されるなら、そのような人たちの終わりの状態は、初めの状態よりももっと悪いものとなります。

（ペテロの手紙第二2章20節）

イエス様は私たちキリスト者がこのような状態にならないように心を配ってくださり、私たちにいろいろな試練を与え、自分を第一としたいという自我を砕いて主の方に目を向

けさせてくださるのであります。ペテロの手紙第一の一章七節に、

信仰の試練は、火を通して精練されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエス・キリストの現われのときに称賛と光栄と栄誉に至るものであることがわかります。

（ペテロの手紙第一1章7節）

とあります。何というありがたい主のみこころでありましょうか。

自分を第一としていたことを悔い改めたとき

さて、預言者ハガイの口を通して、自分たちの現状の窮乏は、神様を第一とせずに自分を第一としたことに対する神様の懲らしめであることを知ったイスラエルの民は、心から悔い改めて再び神殿再建の工事に取りかかりました。それをご覧になった神様はハガイを通してイスラエルの民に次のようにお告げになりました。

さあ、今、あなたがたは、きょうから後のことをよく考えよ。主の神殿で石が積み重ねられる前（神殿の基礎工事が始められる前）は、あなたがたはどうであったか。二十の麦束の積んである所に行っても、ただ十束しかなく、五十おけを汲もう

と酒ぶねに行っても、二十おけ分しかなかった。わたしは、あなたがたを立ち枯れと黒穂病とで打ち、あなたがたの手がけた物をことごとく雹で打った。しかし、あなたがたのうちだれひとり、わたしに帰って来なかった。――主の御告げ。――さあ、あなたがたは、きょうから後のことをよく考えよ。すなわち、第九の月の二十四日、主の神殿の礎が据えられた日から後のことをよく考えよ。種はまだ穀物倉にあるだろうか。ぶどうの木、いちじくの木、ざくろの木、オリーブの木は、まだ実を結ばないだろうか。きょうから後、わたしは祝福しよう。

（ハガイ書2章15～19節）

神様はイスラエルの民に「あなたがたが神殿の再建工事を始める前は、二十束の麦の収穫を期待しても半分しかとれず、五十桶分のブドウ酒を汲もうとしても、わずか二十桶分のぶどう酒しか汲めなかった。それは、わたしのところに立ち返らせようと、麦やぶどうに病気をおこし、また雹を降らして、あなたがたの目をわたしに向けさせるためであった。だが、いま、これからのことに心を留めなさい。あなたがたがわたしの警告を聞き入れて悔い改め、神殿再建工事を再開し、神殿の土台を据えた今日という日から、わたしはあなたがたを祝福しよう。まだ穀物を刈り入れる前に、まだぶどう、いちじく、ざくろ、オリー

ブが実を結ぶ前に、このことをはっきり約束しておく。悔い改めたこの日から、あなたがたを祝福する」と仰せになったのです。神様は人の心の奥底までお見通しになる方であります。ですからイスラエルの民の悔い改めが心からのものであることをお知りになった神様は、神殿が完成してからではなく、神殿の礎が据えられたその日からイスラエルの民を祝福するとはっきり約束されたのであります。これは私たちキリスト者に対するイエス様のお約束でもあるのです。何と恐れ多くありがたいことでありましょうか。

主イエスを第一に生きるキリスト者に対する報い

さてイエス様は、イエス様を第一にして生きる者にどのような祝福をくださるのでしょうか。イエス様の弟子たちの例を見てみましょう。

ペテロが言った。「ご覧ください。私たちは自分の家を捨てて従ってまいりました。」イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子どもを捨てた者で、だれひとりとして、この世にあってその幾倍かを受けない者はなく、後の世で永遠のいのちを受けない者はありません。」

（ルカの福音書18章28～30節）

ペテロをはじめ、イエス様の弟子たちはイエス様からこのような祝福を約束されました。そしてこの祝福の約束は、もし私たちキリスト者がイエス様を第一にして生きれば、私たちにも与えられているのであります。何という深い主のみこころでありましょうか。

ご再臨が間近に迫りつつある前兆が明らかに示されている今、私たちキリスト者は「あなたの現状をよく考えなさい」という主の警告を心を開いて謙虚に受け止め、もし私たちがまだ自分のこと、地上のことを第一にしていることに気づいたならば、ただちに悔い改めて、自分をイエス様に明け渡し、イエス様を第一にして生きることができるように、そのためにますます自我が砕かれ、霊が強められ、イエス様から「あなたを祝福する」と言っていただけるよう、御霊の満たしと導きをいただきながら一日一日を歩んで行きたいと思う次第です。

八　神のみこころを行なうことの喜び

わが神。私はみこころを行なうことを喜びとします。あなたのおしえは私の心のうちにあります。

（詩篇40篇8節）

イスラエルの王ダビデはこのように神様のみこころを行なうことが自分の喜びとなっていると神様に感謝しました。今日は、神様のみこころに従うことを喜びとすることの大切さと、どうしたらそのようになれるかということについて、ごいっしょに考えてみたいと思います。

十字架の贖いは罪の赦しのためだけではない

この問題を考えるには、まず愛と恵みに富みたもう創造主なる神様が、何のために愛するご自分のひとり子の神イエス・キリストを人としてこの世に遣わし、十字架にはりつけ

にされたのかということを知る必要があります。「それはわかっています。神様がご自分に対する背きの罪によって滅びの死に定められている私たち人間をあわれまれ、御子イエス様を罪の身代わりに十字架に架けて私たちの罪を赦してくださるためでしょう」とおっしゃる信者の方が多いと思います。そのとおりです。しかし、ただ人間の罪の赦しのためにだけ神の御子の尊い血が流されたのではありません。十字架の贖いのみわざは、単に人間の罪の赦しのためだけになされたのではありません。では何のためでしょうか。それにはまず神様が人間をお造りになられた目的を知らなければなりません。

神が人を造られた目的

親を心から愛する親孝行の子どもは自分を愛してくれる親を喜ばすことによって親の喜ぶ顔を見ると自分も嬉しくなります。残念なことに親孝行という言葉は久しく耳にしなくなりましたけれども、神様はまさにそのような親しい親子の関係をお望みになって、最初の人間アダムを創造されたのです。ところがアダムはサタンにそそのかされた結果、神様のみこころを守り行なうことを喜ぶどころか、神様のみこころに逆らい、自分の思いを満たすことを喜ぶという神様に対する背きの罪を犯し、そのために神様の怒りを受けること

になってしまったのです。その結果人間は死ぬべきものと神様に定められました。しかも、神様に背いたそのときからアダムの中に入った罪は、アダムの罪の遺伝子としてアダムの子孫である私たち人間すべてに受け継がれたために、人間は神様のみこころに従うことを喜ぶのではなく、自分の肉の願望を満たすことに喜びを覚えるという罪の性質を持って生れついてしまったのです。

神様がご自分の御子イエス様を十字架に架けられたのは、このように神様から離れ背いた人間を罪の中から救い出し、再び神様を愛し神様の仰せを守り行なうことを喜びとするような、神の子どもにふさわしい人間として、神様とともに永遠に生きる人間として神様のみもとに立ち返らせるためでありました。ご自分の愛の対象としてお造りになったにもかかわらず、神様に背いた人間に対して、そのようなみこころをもって御子イエス様を私たちの罪の身代わりにしてまでも私たちを救い、ご自分のもとに立ち返らせ、創造された初めから望んでくださったように、人間に対して親と子のような考えられないほどの特権を再び与えようとしてくださるとは、何というあわれみ深い神様のご愛でありましょうか。

神のみこころに従うことを自分の喜びとする

以上のように人間に対する神様の救いの目的は、私たちが犯した背きの罪によってもたらされた死と滅びからの救出だけではありません。御子イエス様を救い主と信じ、神様のあわれみによって神の子どもという特権を与えられた者が、神様の深い愛のみこころを知って、そのみこころに従うことを自分の喜びとすることであります。これが私たち人間を限りない愛をもって愛し続けてくださる神様のみこころなのであります。

御子イエス様が十字架にお架かりになったのはまさにこの神様のみこころのためでありました。これについてパウロはコリントの教会の信者への手紙で次のように言っています。

> キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方（イエス様）のために生きるためなのです。
>
> （コリント人への手紙第二5章15節）

パウロの言うとおり、イエス様を信じる者は、もはや自分のために生きるのではなく、自分のために十字架に架かって罪の代価を支払ってくださり、また復活されて永遠のいの

ちを与えてくださったイエス様のために生きるのであり、これこそ神様のみこころを喜ばす神の子どもとされたキリスト者の生き方なのであります。

神のみこころを喜ばすためにはどうしたらよいか

しかし、そのために人はまず肉の思いを満たすことだけを考え、それを喜びとするという自己中心のわがままに満ちた自分にはっきりと気がつかなければなりません。そしてそのわがままが神様の御前に砕かれる必要があります。人が心砕かれて神様の前にどうしようもない自己中心の傲慢な者である自分を知ったときに、初めて神様の前にへりくだることができ、そのような自分を主のご支配におゆだねしたいと願うようになることができるからであります。

次に、信じる者のうちに住んでくださっている御霊によってキリスト者の霊が強められ、導かれることがどうしても必要になります。なぜならば御霊を宿しているキリスト者も、この世に置かれている間はなお肉の衣を着ているために、自分を主に明け渡したつもりでも、依然として肉の欲望によって動かされやすいからです。ですからパウロは次のように私たちキリスト者に勧めているのです。

私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。しかし、御霊によって導かれるなら、あなたがたは律法の下にはいません。肉の行ないは明白であって、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、酩酊、遊興、そういった類のものです。前にもあらかじめ言ったように、私は今もあなたがたにあらかじめ言っておきます。こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません。しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。このようなものを禁ずる律法はありません。キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。もし私たちが御霊によって生きるのなら、御霊に導かれて、進もうではありませんか。

（ガラテヤ人への手紙5章16～25節）

肉の衣を着ているキリスト者はパウロが勧めているように、いつも御霊に拠り頼み、御

霊の力によって強められ、肉の欲望に一つ一つ打ち勝って霊的に成長することができるように日々祈り続けることがどうしても必要です。

罪からの自由を神のみこころを行なうために用いる

次に信者が神様のみこころを喜ばすには、信じたことによって罪の奴隷から解放され、与えられた自由を神様に従うために用いることを自分の喜びとすることであります。神様はイエス様を信じる者に完全な自由を与えてくださいました。イエス様は次のように約束してくださいました。

もし子があなたがたを自由にするなら、あなたがたはほんとうに自由なのです。

（ヨハネの福音書8章36節）

このみことばのとおり、イエス様を信じた瞬間に、私たちは罪の束縛から完全に解放されて罪からも死からも自由になったのです。しかし、もし私たちがその自由を自分の思いのままに使えば、また罪を犯すことになります。ペテロはイエス様によって信じる者に与えられた自由をどのように用いるかについて初代教会の信者に次のように勧めています。

あなたがたは自由人として行動しなさい。その自由を、悪の口実に用いないで、

神の奴隷として用いなさい。

（ペテロの手紙第一　2章16節）

またパウロはローマのキリスト者に宛てた手紙の中で、神の奴隷と同じ意味で義の奴隷という言葉を使って次のように言っています。

神に感謝すべきことには、あなたがたは、もとは罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの基準に心から服従し、罪から解放されて、義の奴隷となったのです。あなたがたにある肉の弱さのために、私は人間的な言い方をしています。あなたがたは、以前は自分の手足を汚れと不法の奴隷としてささげて、不法に進みましたが、今は、その手足を義の奴隷としてささげて、聖潔に進みなさい。

（ローマ人への手紙6章17～19節）

奴隷は買い取られた主人に誠心誠意仕えることが求められます。イエス様を信じる私たちキリスト者は、主イエス様にいのちの代価を支払っていただいて罪の中から買い取られた者ですから、代価を払って自分のものとしてくださったご主人である義なる神様と御子イエス様にまごころから仕えるように求められているのであります。

しかし、残念なことにはキリスト者の中には、救われた後の自分に神様が何を望んでお

られるかをよくご存じない人々が少なくありません。ヘブル人への手紙に、

あなたがたは年数からすれば教師になっていなければならないにもかかわらず、神のことばの初歩をもう一度だれかに教えてもらう必要があるのです。あなたがたは堅い食物ではなく、乳を必要とするようになっています。まだ乳ばかり飲んでいるような者はみな、義の教えに通じてはいません。幼子なのです。

（ヘブル人への手紙5章12～13節）

と指摘されている信者は神様のみこころがわからない信仰の幼い信者なのです。神様の愛と恵みを受けてただ喜んでいるだけでは、成長しない幼子のような信者であって、それでは神様のみこころ、すなわち、イエス様がどんな方か、私たち人間のために何をしてくださったかを人々に証しすることはできません。もし親が自分の子が生まれても成長しないのを見たらどんなに悲しむことでしょう。そのように生まれたままで成長しない信者は神様を悲しませる者となってしまいます。

信仰的な幼子の状態のままで霊的に成長しない信者は、何か困難な問題が起こるとそのことに心が奪われ、すぐにイエス様から心が離れ自分の肉の思いに従ってしまいます。そのような信者についてイエス様はたとえによって次のようにおっしゃっています。

岩地に（種を）蒔かれるとは、みことばを聞くと、すぐに喜んで受け入れる人のことです。しかし、自分のうちに根がないため、しばらくの間そうするだけで、みことばのために困難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまいます。また、いばらの中に蒔かれるとは、みことばを聞くが、この世の心づかいと富の惑わしとがみことばをふさぐため、実を結ばない人のことです。

（マタイの福音書13章20～22節）

ヘブル人への手紙に、

ですから、私たちは、キリストについての初歩の教えをあとにして、成熟を目ざして進もうではありませんか。

（ヘブル人への手紙6章1節）

とあるように、私たちはいつまでも信仰の幼子にとどまるのではなく、信仰の成長した者、すなわち神様のみこころを知りそれに従うことによって主が喜んでくださることを自分の一番の喜びとする霊的に成長したキリスト者となりたいものであります。

神のみこころを知るには神の前にへりくだりが必要

では、どうすれば神様のみこころを知ることができるのでしょうか。それにはまず神の御前にへりくだって霊の耳を主に向け、心からどうぞみこころをお示しくださいという態度を取ることが必要です。聖書から預言者サムエルの例を見てみましょう。

サムエルはまだ、主を知らず、主のことばもまだ、彼に示されていなかった。主が三度目にサムエルを呼ばれたとき、サムエルは起きて、エリのところに行き、「はい。ここにおります。私をお呼びになったので。」と言った。そこでエリは、主がこの少年を呼んでおられるということを悟った。それで、エリはサムエルに言った。「行って、おやすみ。今度呼ばれたら、『主よ。お話しください。しもべは聞いております。』と申し上げなさい。サムエルは行って、自分の所で寝た。そのうちに主が来られ、そばに立って、これまでと同じように、「サムエル。サムエル。」と呼ばれた。サムエルは、「お話しください。しもべは聞いております。」と申し上げた。

（サムエル記第一　3章7～10節）

もし私たちが神様からみこころを示していただきたいと心から望むならば、サムエルのように神の御前にへりくだりと従順の心をもって「主よ。お話しください。私は聞いております」という姿勢を取ることが必要です。そうしたとき、きっと神様はご自身のみこと

ろを知ることができるように導いてくださいます。

みこころを問う祈りが必要

このように神の御前に心砕かれ、へりくだってみこころを求める姿勢が整えられた者は、祈りによって神様のみこころを問う者となります。祈りは神様と神のしもべとされた者の交わりのために神様が備えてくださったもっとも大きな恵みの手段であります。しかし私たちキリスト者はこの祈りをどのように日々の信仰生活に生かしているでしょうか。ともすれば「ああしてください、こうしてください」というような、肉の思いによる祈りが多くなってしまうのではないでしょうか。あるいは心を尽くしてみこころを問う祈りではなく、習慣的、惰性的な祈りになってしまっているのではないでしょうか。詩篇の作家は次のように祈っています。

朝にあなたの恵みを聞かせてください。私はあなたに信頼していますから。私に行くべき道を知らせてください。私のたましいはあなたを仰いでいますから。

（詩篇143篇8節）

あなたのみこころを行なうことを教えてください。あなたこそ私の神であられま

すから。

（詩篇143篇10節）

このように祈るときに、主は御霊によってみこころをその人に現わされ、行くべき道を啓示してくださいます。イザヤ書に、

あなたが右に行くにも左に行くにも、あなたの耳はうしろから「これが道だ。これに歩め。」と言うことばを聞く。

（イザヤ書30章21節）

とあるとおりであります。

御霊の導きによってみこころを知る

ここでキリスト者が注意しなければならない大切なことがあります。それは次のことであります。私たちは信仰の歩みにおいて、とかく自分の思いどおりに事が進むときに、主のみこころにかなっていると思い込み、反対に自分が思ったように事が運ばない場合には、これはみこころでないと勝手に考えてしまうことがありはしないでしょうか。しかし、神様のみこころは必ずしも私たちの思いとは一致しません。いやむしろ私たちの思いとは逆

であることが少なくありません。神様のみこころは私たちの思いをはるかに越えて高いので人間の知恵では知り得ないからであります。それはイザヤ書に、

天が地よりも高いように、わたし（神様）の道（お考え）は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。

（イザヤ書55章9節）

とあるとおりです。

ここでパウロとテモテの例を見てみましょう。

それから彼らは、アジヤでみことばを語ることを聖霊によって禁じられたので、フルギヤ・ガラテヤの地方を通った。こうしてムシヤに面した所に来たとき、ビテニヤのほうに行こうとしたが、イエスの御霊がそれをお許しにならなかった。それでムシヤを通って、トロアスに下った。

（使徒の働き16章6～8節）

パウロたちは、二度にわたって自分たちの伝道の行く先を変更させられました。その理由は彼らにはわかりませんでしたが、彼らはすなおに御霊に示されるままに、目的地を変更することが神様のみこころであると知って、それに従ったのであります。私たちは自分

の肉にとって都合のよいほうを選びたいときに、みこころだからという理由をつけて、自分の考えを正当化することがないでしょうか。私たちは聖霊の導きを大切にして、何がほんとうに主のみこころなのかを熱心に祈り求め、教えをいただく必要があります。そして祈りをとおして教えていただいたならば、自分の思いを捨てて主のみこころに従う決心をし、それを実行することが大切です。

前にも申しましたように、私たちキリスト者はイエス様に罪の代価を払って買い取られた主の奴隷、主のしもべであります。その主の奴隷、しもべに対してイエス様は、

天におられるわたしの父のみこころを行なう者はだれでも、わたしの兄弟、姉妹、また母なのです。

（マタイの福音書12章50節）

と言ってくださるのであります。何というありがたいみことばでしょうか。私たちは弱い者で、自分の力ではとうてい主の深いみこころを知り、それに従うことはできません。ですから「神様のみこころを行なう者はだれでも、わたしの兄弟、姉妹、また母です」と言ってくださるイエス様にただ感謝して、主の前にへりくだり主にお聞きすることによってみこころを知り、かつみこころに従うことによってほんとうの霊的な喜びを体験することが

できるように、御霊によって私たちの姿勢を整えていただく必要があります。

終わりに

これまでに申しましたように、神様はご自分の御子イエス様の尊いいのちによって私たち人間を滅びの罪から救い出してくださいました。そしてその大きなご愛のゆえに、神の子どもとしていただいた私たちキリスト者が、主のみこころを知り、みこころに従うことを喜ぶようにと望んでおられます。もし私たちキリスト者が神様に従いたいと心から願って日々の歩みを続けるならば、必ず御霊なるイエス様は私たちの霊を強め、成長させてくださり、ますます深く神様のみこころを知り、それに従うことを喜びとする者としてくださいます。ペテロが初代教会の信者に書き送った手紙に、

こうしてあなたがたは、地上の残された時を、もはや人間の欲望のためではなく、神のみこころのために過ごすようになるのです。

（ペテロの手紙第一　4章2節）

とあります。このようなキリスト者はほんとうに主によって祝福された者であります。ご再臨が間近い今、私たちも残された地上の時を、このように豊かに祝福されて主のみここ

ろのために過ごし、迎えに来てくださるイエス様にお会いできたならばどんなに喜ばしいことでありましょうか。

最後にもう一度冒頭の箇所をお読みして終わりたいと思います。

わが神。私はみこころを行なうことを喜びとします。あなたのおしえは私の心のうちにあります。

（詩篇40篇8節）

九　主の旗を掲げよう

あなたは、あなたを恐れる者のために旗を授けられました。それは、弓にかえて、これをひらめかせるためです。

（詩篇60篇4節）

これは旧約聖書の時代、イスラエルがアラムと戦って散々打ちのめされ、不安と恐怖のとりこになったときのダビデの祈りです。イスラエルがなぜ敗北したか、それは主なる神に拠り頼まずに自分の力で戦ったからです。ダビデはそのことに気づき、このように祈ったのです。ダビデは敵と戦う武器を弓矢にかえて、主なる神を恐れる者に授かった主の旗を高くひらめかせ、主の御力に拠り頼んで戦った結果、勝利を得ることができました。これについてダビデは詩篇二十篇で、

苦難の日に主があなたにお答えになりますように。ヤコブの神（主なる神）の名が、あなたを高く上げますように。主が聖所から、あなたに助けを送り、シオンか

ら、あなたをささえられますように。（4～7節）主があなたの願いどおりにしてくださいますように、あなたのすべてのはかりごとを遂げさせてくださいますように。私たちは、あなたの勝利を喜び歌いましょう。私たちの神の御名により旗を高く掲げましょう。主があなたの願いのすべてを遂げさせてくださいますように。今こそ、私は知る（確信する）。主は、油をそそがれた者（神によって御霊の注ぎを受け、聖なる職務に任命された者）を、お救いになる。主は、右の手の救いの力をもって聖なる天から、お答えになる。ある者はいくさ車を誇り、ある者は馬を誇る。しかし、私たちは私たちの神、主の御名を誇ろう。

（詩篇20篇1～7節）

と主を賛美しました。ダビデは敵に勝つことができたのは、主を恐れる者に授かった旗を高く掲げて戦ったからであり、自分の力によってではなく主から授かった旗によって戦ったダビデに主が応えてくださり、彼に代わって主ご自身が戦ってくださったからであることを体験しました。そしてダビデの口から主の御名を心から賛美し、誇ろうという思いがあふれてこの詩となったのです。

神に属する者に授けられる旗

しかし、このことを通して私たちキリスト者は、主が神の民としてお選びになったイスラエルの民だけにこの旗を授けられるのではなく、神の御子イエス様を救い主と信じ受け入れたことによって、この世に属する者から神に属する者とされたキリスト者にもこの旗を授けてくださっていることを覚える必要があります。

その前にまず、旗とは何を表わすものであるかということを少し考えてみたいと思います。国家には国の旗、国旗があります。国旗はその国の威力、権威を象徴するしるしであります。したがって旗を掲げることは自分がその国の権威の下に帰属しているという意志を、自分がその国のルールに忠実に従うという意志を表わしています。いっぽう国旗を破ったり焼いたりする行為は、その国の権威に従わないこと、その国の方針に反対することを意味します。また軍隊には軍旗が授けられます。軍隊はその軍旗を先頭にして進軍し、敵と戦います。そして軍旗を高く掲げることは戦いに勝利した合図を、あるいは敵に向かって意気盛んに進むことを意味しています。反対に軍旗を下ろす、あるいは軍旗を巻くということは、敗北すること、あるいは退却することを表わすものであります。

アドナイ・ニシ「主はわが旗」

このように国家には国旗があり、軍隊には軍旗が授けられますが、では神の民に授けられる旗とはいったいどのような旗なのでしょうか。出エジプト記一七章一五～一六節に、モーセは神様の力によってアマレクを打ち破ったとき、祭壇を築き、それを「アドナイ・ニシ」すなわち「主はわが旗」と呼んだと書かれています。すなわち、神の民に授けられた旗は主なる神の御名であり、神ご自身のご栄光であり、人となられた神の光であるイエス・キリストであります。

しかし、主はイスラエルの民だけに「アドナイ・ニシ」の旗をお授けになったのではありません。実はイエス・キリストを救い主と信じ受け入れたすべての者にも、神の民、主に属する者としてこの旗をお授けになっているのです。しかし神の民、主に属する者とされたキリスト者に、神のご栄光を表わす旗が授けられているということについて、私たちは果たしてどれほど自覚しているでしょうか。かつての私自身はそのことをまったく自覚していないキリスト者でありました。

旗幟を鮮明にしないキリスト者

旗幟鮮明という言葉があります。これは自分の旗印を高く掲げて自分がその旗に属する者であるという、自分の立場、態度を鮮明にすることであります。しかし、私たちは「アドナイ・ニシ」、すなわち「主はわが旗」という神のご栄光を表わす旗をいつも高く掲げて、自分が主に属する者であることを鮮明にして生活をしているでありましょうか。あるいはこれとは反対に、この世を憚って主の旗を巻き、人を恐れて主の旗を伏せ、自分が主に属する者であることを明らかにしないで生活しているのではないのでしょうか。イエス様は、

だれも、あかりをつけてから、それを穴倉や、枡の下に置く者はいません。燭台の上に置きます。はいって来る人々に、その光が見えるためです。

（ルカの福音書11章33節）

とご自分を光にたとえておっしゃっています。尊いいのちを捨てて私たちを滅びに至る罪から贖い出してくださったイエス様は使徒の働き四章一二節でペテロが証ししたように、

この方（イエス様）以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの

御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。

（使徒の働き4章12節）

と、贖い出された私たちが主に属する者として、だれの目にも見えるように、光であるご自分を高く掲げて証しをするようにと命じておられるのです。そしてイエス様はまた、

わたしを人の前で認める者はみな、わたしも、天におられるわたしの父の前でその人を認めます。しかし、人の前でわたしを知らないと言うような者なら、わたしも天におられるわたしの父の前で、そんな者は知らないと言います。

（マタイの福音書10章32～33節）

ともおっしゃっています。人の前でわたし、すなわちイエス様を知らないと言うような者とは、あかりを穴倉や枡の下に置く者であり、主の旗を隠して自分が主に属する者であり、主イエス様のしもべであることを人前で証しをすることを恐れ、口をつぐんでしまう者であります。そしてそのような者はイエス様から「そんな者は知らない」と言われてしまうのです。

キリスト者に対するサタンの攻撃

私たちキリスト者は天の御国に召されるまでは、まだサタンが支配しているこの世で生きて行かなければなりません。サタンはかつては自分の支配下にあった私たちがイエス様によって主に属する者とされたことを怒り、イエス様を憎み、私たちを憎み、私たちを主に用いられないように、そして主から引き離してふたたび自分の奴隷にしようと、あの手この手を使って日夜攻撃を仕掛けて来ます。イエス様はこの世の人々がなぜ主に属する者を憎むのかその理由を弟子たちに説明しておられます。

もし世（この世の支配者であるサタンと、その支配下にあるこの世の人々）があなたがたを憎むなら、世はあなたがたよりもわたしを先に憎んだことを知っておきなさい。もしあなたがたがこの世のものであったなら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではなく、かえってわたしが世からあなたがたを選び出したのです。それで世はあなたがたを憎むのです。

（ヨハネの福音書15章18～19節）

前にも申しましたように、かつての私はイエス様を信じたと言っても、名ばかりの信者

であり、主に属する者としての自覚はまったくなく、この世の人と何ら変わることのない生活をしていても心に少しの咎めも感じていませんでした。そしてそのときは親類、友人、知人との関係はたいへん良く、何の問題もありませんでした。しかし、このような名ばかりの信者はサタンにとってはもはや憎むべき相手ではなく、怖くも恐ろしくもない、自分の手で自由に操ることのできるこの世の人間と同様な存在にしか過ぎないのです。

イエス様が、

だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。

（マタイの福音書6章24節）

とおっしゃっているとおり、またヤコブがその手紙で、

貞操のない人（信者）たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友となりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです。

（ヤコブの手紙4章4節）

と言っているように、洗礼を受けてはいても、教会に通ってはいても、それが形だけのものに過ぎず、日常生活の上ではこの世を愛し、この世と妥協しても、この世の基準で物事を考えても、何のやましさも感じないような信者は主から授かった旗を汚す者であり、そのような名ばかりの信者は自分を神の敵であるサタンに属する者としているのです。

旗幟を鮮明にしたキリスト者

いっぽう、自分が主に属する者であることを旗幟鮮明にしたキリスト者に対しては、サタンは憎むべき敵としてあらゆる手を使って攻撃して来ます。私にも同じことが起こりました。私が御霊の導きをいただき、イエス様の贖いのみわざが私のためであったことをはっきり知って、今までの名ばかりのキリスト者であった自分と訣別し、はっきり主の旗を掲げて主を証しし始めてからは、親族や友人たちの態度が一変しました。それまでのように私に対する親しい、打ち解けた態度を示すことがなくなり、敬遠するようになったのです。パウロが、

生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊の

ことは御霊によってわきまえるものだからです。御霊を受けている人は、すべてのことをわきまえますが、自分はだれによってもわきまえられません。

（コリント人への手紙第一2章14～15節）

と言っているとおりであります。この体験を通して私は御霊をいただいて主に属する者とされている自分が、サタンから敵とみなされる者となったことをはっきり知ったのです。そしてサタンに囚われていることも知らないで滅びに至る道を歩んでいる親族、友人らの救いを真剣に祈らなければならないと強く思わされたのであります。

神の義と愛の旗印

では主に属する者が掲げて進む主の旗の旗印とは具体的にはどんな旗印なのでしょうか。それは神の義（正しさ）と神の愛であります。パウロは神の義について次のようにローマ人への手紙で言っています。

今は、律法とは別に、しかも律法と預言者によってあかしされて、神の義（正しさ）が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません。すべての人は、

罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現わすためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです。それは、今の時にご自身の義を現わすためであり、こうして神ご自身が義であり、また、イエスを信じる者を義とお認めになるためなのです。

（ローマ人への手紙3章21～26節）

このように、主はパウロを通して主に属する者が掲げる旗印は御子イエス様によって現わされた神の義であることを私たちにお示しになっておられるのです。主に属する者はこの神の義の旗印を翻して進むのであります。

また主に属する者の旗印は御子イエス様によって現わされた神の愛であります。ヨハネは次のように言っています。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世（罪に汚れた世と人々）を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいの

ちを持つためである。

（ヨハネの福音書3章16節）

これこそご自分に逆らい、罪に汚れ果てた世の人々に、尊いひとり子の神イエス様を十字架に架けてまで罪からの救いを与えてくださる神様のご愛であります。主に属する者はこの旗印、すなわち神の義と愛である主イエス・キリストを掲げて進軍し、戦うのであります。

戦いの目的

では主に属する者は何のために、何の目的で主の旗を掲げて戦うのでありましょうか。ユダの手紙には次のように記しています。

愛する人々よ。あなたがたは、自分の持っている最も聖い信仰の上に自分自身を築き上げ、聖霊によって祈り、神の愛のうちに自分自身を保ち、永遠のいのちに至らせる、私たちの主イエス・キリストのあわれみを待ち望みなさい。疑いを抱く人々をあわれみ、火の中からつかみ出して救い、またある人々を、恐れを感じながらあわれみ、肉によって汚されたその下着さえも忌みきらいなさい。

（ユダの手紙20～23節）

このように主に属する者の戦いは、主のさばきの日が迫っているとも知らずに、滅びに至る道を歩んでいる多くの人々を火の中、すなわちサタンの手から取り戻すための戦いなのであります。

当然のことながらこの戦いは容易なものではなく、多くの患難があることを覚悟しなければなりません。というのは前にも申しましたように、サタンは主のご栄光の現われを妨げようと必死になって私たちの進軍を妨害して来るからであります。しかし恐れることはありません。私たちがこの戦いを自分の力によってではなく、神の義と愛の旗印を高く掲げ、主に信頼して戦うならば、私たちに代わって主ご自身が戦ってくださるからです。

あなたが敵と戦うために出て行くとき、馬や戦車や、あなたよりも多い軍勢を見ても、彼らを恐れてはならない。あなたをエジプトの地から導き上られたあなたの神、主が、あなたとともにおられる。あなたがたが戦いに臨む場合は、祭司は進み出て民に告げ、彼らに言いなさい。「聞け。イスラエルよ。あなたがたは、きょう、敵と戦おうとしている。弱気になってはならない。恐れてはならない。うろたえてはならない。彼らのことでおじけてはならない。共に行って、あなたがたのために、

あなたがたの敵と戦い、勝利を得させてくださるのは、あなたがたの神、主である。

（申命記20章1～4節）

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。見よ。あなたに向かっていきりたつ者はみな、恥を見、はずかしめを受け、あなたと争う者たちは、無いもののようになって滅びる。あなたと言い争いをする者を捜しても、あなたは見つけることはできず、あなたと戦う者たちは、全くなくなってしまう。

（イザヤ書41章10～12節）

このように、私たちはただ「アドナイ・ニシ」という主の旗を高々と掲げて、その旗の下で主に信頼し、主におゆだねして信仰の戦いを進めれば、主ご自身が戦って勝利してくださるのです。

主がご自分に背き逆らう者をおさばきになる終わりの日が迫っていることを私たちは今日の混乱した世界の情勢から、また社会の情勢から日々強く覚えます。このときこそ、私たちキリスト者はともに主のご再臨を心から待ち望みつつ、主に属する者であることを示

す主の旗を高く掲げて、神の義と愛そのものの方であるイエス様を世の人々に力強く証しして行きたいと切に祈る次第です。最後にイザヤ書一一章十節のみことばをお読みして終わります。

その日（終末の日、主がご栄光を現わされる日）、エッサイの根（イエス・キリスト）は、国々の民の旗として立ち、国々は彼を求め、彼のいこう所は栄光に輝く。

（イザヤ書11章10節）

十　世の終わりに臨んでいるキリスト者への教訓

兄弟たち。私はあなたがたにぜひ次のことを知ってもらいたいのです。私たちの先祖はみな、雲の下におり、みな海（紅海）を通って行きました。そしてみな、雲と海とで、モーセにつくバプテスマを受け、みな同じ御霊の食べ物を食べ、みな同じ御霊の飲み物を飲みました。というのは、彼らについて来た御霊の岩から飲んだからです。その岩とはキリストです。にもかかわらず、彼らの大部分は神のみこころにかなわず、荒野で滅ぼされました。（11節～）これらのことが彼らに起こったのは、戒めのためであり、それが書かれたのは、世の終わりに臨んでいる私たちへの教訓とするためです。ですから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい。

（コリント人への手紙第一10章1～5、11～12節）

今日はパウロがコリントの信者に書き送った手紙の中から、パウロが「兄弟たち。私は

あなたがたにぜひ知ってもらいたい」と、手紙を通して世の終わりに臨んでいる私たちキリスト者に伝えているこのメッセージについてごいっしょに考えたいと思います。

ここでパウロは「これらのことが彼らに起こったのは、戒めのためであり、それが書かれたのは世の終わりに臨んでいる私たちへの教訓とするためです」と言っています。しかし彼ら、すなわちイスラエルの民に起こったことがどうして私たちキリスト者への教訓になるのでしょうか。イスラエルの民と異邦人でありながらイエス様を信じている私たちとの間にどんな共通点があるのでしょうか。そして、彼らに起こったこととはどのようなことなのでしょうか。

イスラエルの民もキリスト者も神に選ばれた民

イスラエルの民は神に選ばれた神の民であると聖書にあります。

あなたの神、主は、地の面のすべての国々の民のうちから、あなたを選んでご自分の宝の民とされた。主があなたがたを恋い慕って、あなたがたを選ばれたのは、あなたがたがどの民よりも数が多かったからではない。事実、あなたがたは、すべての国々の民のうちで最も数が少なかった。

（申命記7章6～7節）

しかし、神様の選びはイスラエルの民だけに限定されたのではなく、私たち異邦人にも神様のあわれみは注がれているのです。パウロはローマ人のキリスト者に対して次のように言っています。

神は、このあわれみの器として、私たちを、ユダヤ人の中からだけでなく、異邦人の中からも召してくださったのです。それは、ホセアの書でも言っておられるとおりです。「わたしは、わが民でない者をわが民と呼び、愛さなかった者を愛する者と呼ぶ。『あなたがたは、わたしの民ではない。』と、わたしが言ったその場所で、彼らは、生ける神の子どもと呼ばれる。」

（ローマ人への手紙9章24～26節）

このように、イスラエルの民も、また私たちのような異邦人のキリスト者も、神の民として選ばれた理由は選ばれる者の側にあるのではなく、ただ一方的な神様のあわれみによるものであるという点で共通しています。

イスラエルの民とキリスト者の共通点

また、イスラエルの民と異邦人のキリスト者との共通点は、同じように神様の手によって奴隷の状態から脱出させていただき、同じようにバプテスマを受け、同じように神様の賜物である天からの恵みの食べ物を食べ、同じように神様の賜物である岩からわき出た水を飲んだということです。

イスラエルの民は神様のあわれみを受け、神様の救いの御手に導かれて、奴隷のような苦役を強いられていたエジプトから脱出することができました。神様は次のように仰せになっています。

わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。

（出エジプト記20章2節）

イスラエルの民と同じように、私たち異邦人のキリスト者も神様のあわれみを受けました。そして神様の救いの御手そのものである、ひとり子の神イエス様によって罪の奴隷から解放されたのです。パウロがガラテヤの信者に宛てて、

キリストは、自由を得させるために、私たちを（罪の奴隷から）解放してくださいました。ですから、あなたがたは、しっかり立って、またと奴隷のくびきを負わせられないようにしなさい。

（ガラテヤ人への手紙5章1節）

と書いているとおりであります。

またイスラエルの民も私たち異邦人もバプテスマを受けました。

パウロはイスラエルの民が受けたバプテスマについて冒頭のコリント人への手紙第一、十章一～二節に、

私たちの先祖はみな、雲の下におり、みな海を通って行きました。そしてみな、雲と海とで、モーセにつくバプテスマを受け、……

（コリント人への手紙第一10章1～2節）

と記しています。パウロは神様が雲を案内役としてイスラエルの民を導き、また紅海の水を開いて彼らを安全に導いてくださった出来事を、神様のご命令によって彼らを導くモーセに従っていったイスラエルの民が、神様から雲と海とによってバプテスマを受けたと説き明しているのです。

では異邦人の私たちは何によってバプテスマを受けたのでしょうか。それはイエス様が与えてくださる聖霊によってであります。洗礼者ヨハネは次のように証言しました。

水でバプテスマを授けさせるために私を遣わされた方（主なる神）が、私に言われました。「聖霊がある方（御子イエス様）の上に下って、その上にとどまられるのがあなたに見えたなら、その方こそ、聖霊によってバプテスマを授ける方である。」私はそれを見たのです。それで、この方が神の子であると証言しているのです。

（ヨハネの福音書1章33～34節）

イエス様ご自身も復活された後、弟子たちに、

ヨハネは水でバプテスマを授けたが、もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるからです。

（使徒の働き1章5節）

と約束されました。私たちキリスト者はこの聖霊によってイエス様からバプテスマを授けられ、信じる者とされたのです。聖霊によるバプテスマこそがまことのバプテスマであり、水のバプテスマはイエス様を信じた証しとして受けるものなのであります。

さてエジプトから導き出されたイスラエルの民がエジプトから約束の地カナンに向かう旅の途中、荒野で飢えたときに、神様は天からマナというパンをお降らせになり、彼らはそれを食べて満ち足りました。また彼らが荒野で飲み水がなく喉が渇いたときに、神様は岩から水を湧き出させて、彼らは飲んで満ち足りました。

主はモーセに仰せられた。「見よ。わたしはあなたがたのために、パン（マナ）が天から降るようにする。民は外に出て、毎日、一日分を集めなければならない。これは、彼らがわたしのおしえに従って歩むかどうかを、試みるためである。」

（出エジプト記16章4節）

主はモーセに仰せられた。「民の前を通り、イスラエルの長老たちを幾人か連れ、あなたがナイルを打ったあの杖を手に取って出て行け。さあ、わたしはあそこのホレブの岩の上で、あなたの前に立とう。あなたがその岩を打つと、岩から水が出る。民はそれを飲もう。」そこでモーセはイスラエルの長老たちの目の前で、そのとおりにした。

（出エジプト記17章5～6節）

パウロがイスラエルの民に与えられた天からのパン（マナ）、岩から湧き出た水につい

て、冒頭の手紙十章三〜四節で「みな同じ御霊の食べ物を食べ、みな同じ御霊の飲み物を飲みました。というのは、彼らについて来た御霊の岩から飲んだからです。その岩とはキリストです」と説き明かしているのは、神様がイエス様という岩を十字架に架けて砕かれて、いのちの水を飲ませられたということです。

イスラエルの民と同じように、私たち異邦人のキリスト者も神様から御霊の食べ物、御霊の飲み物をいただきました。それはイエス・キリストであります。

わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きます。またわたしが与えようとするパンは、世のいのちのための、わたしの肉です。（54節〜）わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っています。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。わたしの肉はまことの食物、わたしの血はまことの飲み物だからです。

（ヨハネの福音書6章51、54〜55節）

神様は天からマナを降らせてイスラエルの民の飢えをいやし、モーセに命じて岩を打たせて水を出させ、その水を飲んだイスラエルの民は渇きをいやされましたが、キリスト者のためには愛する御子イエス様を十字架に架けられ、その肉と血を御霊の食べ物、飲み物

としてお与えになったのです。

彼らが食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福して後、これを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取って食べなさい。これはわたしのからだです。」また杯を取り、感謝をささげて後、こう言って彼らにお与えになった。「みな、この杯から飲みなさい。これは、わたしの契約の血（十字架の上で流されたイエス・キリストの血によって神への背きの罪を赦すという、人間に対する神様の契約）です。罪を赦すために多くの人のために流されるものです。」

（マタイの福音書26章26～28節）

イスラエルの民のむさぼった悪

今まで見てまいりましたように、イスラエルの民は神様から選ばれて神の民とされ、神様から御霊の食べ物、御霊の飲み物をいただくという大きな恵みを受けました。「にもかかわらず、彼らの大部分は神のみこころにかなわず、荒野で滅ぼされました」とパウロは冒頭の手紙十章五節に書いています。なぜでしょうか。それはイスラエルの民が苦役に苦しめられていたエジプトから救い出されたにもかかわらず、約束の地カナンへ向かう荒野

の旅でいつもつぶやき神様に従わなかったからです。そして、パウロは神様がイスラエルの民の中の多くの者を荒野で滅ぼされたのは彼らが数々の悪をむさぼったからであり、そのことを世の終わりに臨んでいるあなたがた異邦人のキリスト者は自分たちの教訓にしなさいと書いています。

ではイスラエルの民のむさぼった悪とは何でしょうか。まずパウロは冒頭の手紙十章七節に彼らの偶像崇拝を挙げています。

あなたがたは、彼らの中のある人たちにならって、偶像崇拝者となってはいけません。聖書には、「民が、すわっては飲み食いし、立っては踊った。」と書いてあります。

（コリント人への手紙第一10章7節）

これについて出エジプト記には次のように詳しく記されています。

民はモーセが山（神から神のおしえと命令を記した石の板を授かるために上って行ったシナイ山）から降りて来るのに手間取っているのを見て、アロンのもとに集まり、彼に言った。「さあ、私たちに先だって行く神を、造ってください。私たちをエジプトの地から連れ上ったあのモーセという者が、どうなったのか、私たちに

はわからないから。」それで、アロンは彼らに言った。「あなたがたの妻や、息子、娘たちの耳にある金の耳輪をはずして、私のところに持って来なさい。」そこで、民はみな、その耳にある金の耳輪をはずして、アロンのところに持って来た。彼がそれを、彼らの手から受け取り、のみで型を造り、鋳物の子牛にした。彼らは、「イスラエルよ。これがあなたをエジプトの地から連れ上ったあなたの神だ。」と言った。アロンはこれを見て、その前に祭壇を築いた。そして、アロンは呼ばわって言った。「あすは主への祭りである。」そこで、翌日、朝早く彼らは全焼のいけにえをささげ、和解のいけにえを供えた。そして、民はすわっては、飲み食いし、立っては、戯れた。主はモーセに仰せられた。「さあ、すぐ降りて行け。あなたがエジプトから連れ上ったあなたの民は、堕落してしまったから。」

（出エジプト記32章1～7節）

またパウロは冒頭の手紙十章八節にイスラエルの民の姦淫を挙げています。

私たちは、彼らのある人たちが姦淫をしたのにならって姦淫をすることがないようにしましょう。

（コリント人への手紙第一10章8節）

これについて民数記には次のように記されています。

イスラエルはシティムにとどまっていたが、民はモアブ（異教徒）の娘たちと、みだらなことをし始めた。娘たちは、自分たちの神々にいけにえをささげるのに、（イスラエルの）民を招いたので、民は食し、娘たちの神々を拝んだ。こうしてイスラエルは、バアル・ペオル（偶像の神）を慕うようになったので、主の怒りはイスラエルに対して燃え上がった。

（民数記25章1～3節）

神様は偶像の神々を礼拝する異邦人の女と交わり、彼女たちの神々を慕うようになったイスラエルの民を、姦淫の罪を犯した者として厳しくさばかれたのです。

またパウロは冒頭の手紙十章九、十節にイスラエルの民が神様を試み、また不平不満を言ったことを挙げて次のように言っています。

私たちは、さらに、彼らの中のある人たちが主を試みたのにならって主を試みることはないようにしましょう。（10節）また、彼らの中のある人たちがつぶやいたのにならってつぶやいてはいけません。

（コリント人への手紙第一10章9、10節）

神様を試みるとは、親が子を愛するように愛してくださる真実な神様を疑うこと、信頼しないことであります。

また神様を疑い、つぶやいたイスラエルの民についてアサフは詩篇七八篇で次のように言っています。

神は、彼らの先祖たちの前で、エジプトの地、ツォアンの野で、奇しいわざを行なわれた。神は海を分けて彼らを通らせ、せきのように水を立てられた。神は、昼は雲をもって、彼らを導き、夜は、夜通し炎の光で彼らを導いた。荒野では岩を割り、深い水からのように豊かに飲ませられた。また、岩から数々の流れを出し、水を川のように流された。それなのに、彼らはなおも神に罪を犯し、砂漠（約束の地への旅の途上）で、いと高き方に逆らった。彼らは欲するままに食べ物を求め、心のうちで神を試みた。そのとき彼らは神に逆らって、こう言った。「神は荒野の中で食事を備えることができようか。確かに、岩を打たれると、水がほとばしり出て、流れがあふれた。だが、神は、パンをも与えることができようか。ご自分の民に肉を備えることができようか。」それゆえ、主は、これを聞いて激しく怒られた。

（詩篇78篇12～21節）

以上に挙げましたように、イスラエルの民は神様から選ばれ、神様によって奴隷の苦役から脱出させていただき、その後も彼らをずっと支え導いてくださったにもかかわらず、その恵みを忘れて神様に信頼せず、神様を疑い、神様に従わずに神様の怒りを引き起こすようなさまざまな悪をむさぼりました。そのために神様はご自分を恐れず、ご自分に従わない多くのイスラエルの民に対して目的の地であるカナンにはいることをお許しになりませんでした。パウロがイスラエルの民に起こったことを世の終わりに臨んでいるあなたがたキリスト者の教訓にしなさいと言っているのは、じつにこのことであります。ヘブル人への手紙には次のようなキリスト者に対する戒めの言葉があります。

兄弟たち。あなたがたの中では、だれも悪い不信仰の心（主に従わない不従順の心）になって生ける神から離れる者がないように気をつけなさい。「きょう。」と言われている間に、日々互いに励まし合って、だれも罪に惑わされてかたくなにならないようにしなさい。もし最初の確信を終わりまでしっかり保ちさえすれば、私たちは、キリストにあずかる者となるのです。「きょう、もし御声を聞くならば、御怒りを引き起こしたときのように、心をかたくなにしてはならない。」と言われているからです。聞いていながら、御怒りを引き起こしたのはだれでしたか。モーセ

に率いられてエジプトを出た人々の全部ではありませんか。神は四十年の間だれを怒っておられたのですか。罪を犯した人々、しかばねを荒野にさらした、あの人たちをではありませんか。また、わたしの安息（天の御国における永遠の安息）にはいらせないと神が誓われたのは、ほかでもない、従おうとしなかった人たちのことではありませんか。それゆえ、彼らが（天の御国における）安息にはいれなかったのは、不信仰（主に対する不従順）のためであったことがわかります。

（ヘブル人への手紙3章12～19節）

さらにヘブル人への手紙の著者は四章一一節において、

ですから、私たちは、この（天の御国における永遠の）安息にはいるよう力を尽くして努め、あの不従順の例にならって落後する者が、ひとりもいないようにしようではありませんか。

（ヘブル人への手紙4章11節）

とイスラエルの民のように、主に対する不従順によって天の御国にはいれないようなことにならないよう、ご再臨の時取り残されることのないよう、力を尽くして主に従おうではないかと、今まさに世の終わりに臨んでいる私たちキリスト者に呼びかけているのです。

最後に私たちはパウロが冒頭のコリント人への手紙第一、十章一二節で「ですから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい」と言っていることに注目したいと思います。これは神の民であるイスラエル人の不信仰をさげすみ、自分の信仰を誇ってはならないという、私たち異邦人のキリスト者を戒めるメッセージであります。パウロはイスラエルの民を台木のオリーブの枝、異邦人を野生種のオリーブの枝にたとえて次のように説き明かしをしています。

もしも、枝の中のあるものが折られて、野生種のオリーブであるあなた（異邦人）がその枝に混じってつがれ、そしてオリーブの根の豊かな養分をともに受けているのだとしたら、あなたはその枝に対して誇ってはいけません。誇ったとしても、あなたが根をささえているのではなく、根があなたをささえているのです。枝（イスラエルの民）が折られたのは、（異邦人の）私がつぎ合わされるためだ、とあなたは言うでしょう。そのとおりです。彼らは不信仰によって折られ、あなたは信仰によって立っています。高ぶらないで、かえって恐れなさい。もし神が台木の枝を惜しまれなかったとすれば、あなたをも惜しまれないでしょう。見てごらんなさい。神のいつくしみときびしさを。倒れた者の上にあるのは、きびしさです。あなたの

上にあるのは、神のいつくしみです。ただし、あなたがそのいつくしみの中にとどまっていればであって、そうでなければ、あなたも切り落とされるのです。

（ローマ人への手紙11章17～22節）

ご再臨の間近い今、私たちキリスト者はイスラエルの民に起こったことを自分自身への大切な教訓として、改めて神の民に選ばれた幸いな者であることをしっかり自覚し、ますます主を恐れ、主の前にへりくだって、ご再臨を心から待ち望みつつ、日々主に忠実に従う信仰の歩みを進めたいと切に祈る次第です。

十一　今、必要とされている者はだれか

その後、主は、別に七十人を定め、ご自分が行くつもりのすべての町や村へ、ふたりずつ先にお遣わしになった。そして、彼らに言われた。「実りは多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主に、収穫のために働き手を送ってくださるように祈りなさい。さあ、行きなさい。いいですか。わたしがあなたがたを遣わすのは、狼の中に小羊を送り出すようなものです。」

（ルカの福音書10章1～3節）

今日はこのみことばからご再臨も間近い今、主が必要とされているのはだれかということについてごいっしょに考えてみたいと思います。

主の器としての選びの基準

イエス様の弟子には、ペテロ、ヨハネなどのいわゆる十二使徒と呼ばれる弟子のほかに

も、名も知られない多くの弟子たちがいました。ここに記された七十人もそのような弟子たちですが、主は多くの弟子たちの中から彼らを選抜なさって福音伝道に派遣されたのであります。なぜこの七十人が選ばれたのでしょうか。収穫の働き手としてお選びになった七十人とは、主イエス様が「実り（救われるべき人々）は多いが、働き手（主イエス様の救いを宣べ伝えるための働き手）は少ない」とおっしゃってお選びになった七十人とは、どのような人々であったのでしょうか、私たちは知りたいと思います。

そのことを考えるために、まずイエス様はどのような者を最初の弟子としてお選びになったのかということから順に考えを進めてみたいと思います。マルコの福音書には次のように書かれています。

ガリラヤ湖のほとりを通られると、シモン（後のペテロ）とシモンの兄弟アンデレが湖で網を打っているのをご覧になった。彼らは漁師であった。イエスは彼らに言われた。「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしてあげよう。」すると、すぐに、彼らは網を捨て置いて従った。

（マルコの福音書1章16～18節）

また弟子のヤコブとその兄弟ヨハネも漁師でしたし、弟子のマタイは人に嫌われる取税

人でした。なぜイエス様はこのような人々を弟子にお選びになったのでしょうか。

パウロは主の選びの基準がどのようなものであるか、またどうしてそのような基準でお選びになったかについて次のように説き明かしています。

兄弟たち。あなたがたの召しのことを考えてごらんなさい。この世の知者は多くはなく、権力者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。しかし神は、知恵ある者をはずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者をはずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものをない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。これは神の御前でだれをも誇らせないためです。

（コリント人への手紙第一1章26～29節）

主はこのようにご自分の前で誇らせないために、意図的にこの世の愚かな者、この世の弱い者、この世の取るに足りないもの、人から見下されている者、無に等しい者をお選びになったのです。

イエス様を救い主として心から受け入れた人々はすべて、イエス様の選びの基準に該当

していています。なぜならば自分がいかに無力で、愚かで、取るに足りない、無に等しい者であるかを知っているからであります。そしてこのような者を主は弟子として用いたいと思っておられるのです。

信者のすべてが用いられる器か

しかし、イエス様に選ばれた十二人の弟子たちも、最初は主に用いられる器ではありませんでした。次のみことばにあるとおりです。

さて、ゼベダイのふたりの子、ヤコブとヨハネが、イエスのところに来て言った。「先生。私たちの頼み事をかなえていただきたいと思います。」イエスは彼らに言われた。「何をしてほしいのですか。」彼らは言った。「あなたの栄光の座で、ひとりを先生の右に、ひとりを左にすわらせてください。」しかし、イエスは彼らに言われた。「あなたがたは自分が何を求めているのか、わかっていないのです。」

（マルコの福音書10章35～38節）

彼らはすべてを捨ててイエス様に従ったはずなのに、まだ砕かれていない人間的な思いからこのように自分の栄光と報酬を求めてしまったのです。ほかの十人の弟子は自分の栄

光を先がけて願ったヤコブとヨハネのことを聞いて腹を立てたとありますが、これも人間的な思いであります。イエス様はこの弟子たちを戒めて次のようにおっしゃいました。

あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。あなたがたの間で人の先に立ちたいと思う者は、みなのしもべになりなさい。人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。

（マルコの福音書10章43～45節）

主は自分が取るに足りない者であること、最も小さな者であることを心から思い知った者だけがご自分の弟子にふさわしい者であるとおっしゃったのです。ペテロも人間的な思いでイエス様を慕って付き従っていました。イエス様が人々の罪の贖いのために死ななければならないことを弟子たちにお告げになったときに、ペテロはイエス様のみこころを理解できずに人間的な思いで主を諫め、このため主から、

下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。

（マタイの福音書16章23節）

と厳しく叱責されました。

自我が砕かれた信者を主は用いられる

ペテロがほんとうに主に用いられる器となったのは、彼が牢であろうと、死であろうとイエス様といっしょにいる覚悟ができていると断言したにもかかわらず、捕らえられたイエス様の面前で三度もイエス様を知らないと否定してしまった自分の惨めさ、無力さを心から悲しみ、泣いて悔い改めてからであります。ヤコブが初代教会の信者に宛てた手紙に、

あなたがたは、苦しみなさい。悲しみなさい。泣きなさい。あなたがたの笑いを悲しみに、喜びを憂いに変えなさい。

（ヤコブの手紙4章9節）

とありますが、ヤコブはどうしてこのような一見矛盾すると思われることを信者に書いたのでしょうか。それは、主の用いられる器となるためには、主の通りよき管となるためには、悲しみ、苦しみを通して私たちのかたくなな自我が砕かれる必要があるということを伝えたかったからであります。

パウロも大いに主に用いられた器であることはご存じのとおりであります。彼は他の使

徒とは異なり、小アジア・キリキヤ、今のトルコのタルソという町で生まれ、社会的な身分も高く、ギリシャ文化の教育を受け、ローマ市民権も持つ血筋の良いユダヤ人でした。彼自身次のように言っています。

もし、ほかの人が人間的なものに頼むところがあると思うなら（この世的、肉的なもの、すなわち血統や経歴を拠り所とし、それを誇るなら）、私はそれ以上です。私は八日目の割礼を受け（純粋のユダヤ人を意味します）、イスラエル民族に属し、ベニヤミン（イスラエルの十二部族の中でも誇り高い部族）の分かれの者です。きっすいのヘブル人（外国に住む外国語しか話せぬユダヤ人ではなく、ヘブル語を話すユダヤ人）で、律法についてはパリサイ人（彼は高名な律法学者ガマリエルに師事してパリサイ派の律法、すなわち律法を忠実に守ることをもって義とされるという律法を学んだ）、その熱心（ユダヤ教の信仰を守り行なう熱心）は教会（キリスト教会）を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者です。

（ピリピ人への手紙3章4～6節）

しかし主はパウロが自分の血統や身分や経歴や知識や信仰の熱心を誇っているときには

彼を器としてお用いにはなりませんでした。彼が用いられるようになったのは、自我が砕かれて、イエス様を信じる人々を迫害し、死にさえ至らしめたという、自分の犯した主に対する恐ろしい背きの罪が示され、へりくだってイエス様を救い主として心から受け入れた結果、今まで誇っていたものがイエス様の前にまったく無価値なものと思うようになってからであります。彼は前の言葉に続けて次のように言いました。

しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私は、キリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。

（ピリピ人への手紙3章7～8節）

後になってパウロは子どものように愛していた弟子のテモテに宛てた手紙で、自分は罪人のかしらであると書いています。

私は以前は、神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者でした。それでも、（イエス・キリストを救い主と）信じていないときに知らないでしたことなので、あわれみを受けたのです。私たちの主の、この恵みは、キリスト・イエスにある信仰

と愛とともに、ますます満ちあふれるようになりました。「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。しかし、そのような私があわれみを受けたのは、イエス・キリストが、今後彼を信じて永遠のいのちを得ようとしている人々の見本にしようと、まず私に対してこの上ない寛容を示してくださったからです。

（テモテへの手紙第一 1章13～16節）

パウロは復活の主に出会って霊の目が開かれたとき、今まで自分の頭で考えたことがすべて正しいと信じて生きてきた自分がほんとうに愚かで、まったく取るに足りない者であることを心の底から思い知ったのです。そして自分のような取るに足りない愚かな者を主が救い、弟子としてくださったのは、ただ主が自分をあわれみの見本とされるためであると告白することができたのです。主の弟子とされたパウロは、それから殉教の死を遂げるまで幾多の迫害に会いながら、主に用いられる器として福音を宣べ伝え続けました。また新約聖書の後半に掲載されている手紙類はイエス様を主と受け入れたキリスト者の信仰の成長にとってたいへん重要な指針ですが、これらの手紙の大半はパウロによるものです。

自我が砕かれ、主の前に取るに足りない者と心からへりくだったパウロを主が大いにお用いになって私たち信者のために必要なこれらの手紙をお書かせになったのであります。

自分の栄光を誇る信者と主の栄光を喜ぶ信者

ここで自分の栄光を誇る信者と主のご栄光を喜ぶ信者について考えてみたいと思います。自分たちが福音伝道の成果を挙げたのに、ご再臨の日に主から報いを受けられなかったと主張する者に対して、主は次のように厳しい態度をお取りになりました。

その日（ご再臨の日）には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。「主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。」しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。「わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。」

（マタイの福音書7章22～23節）

この人々と対照的なのはイエス様に選ばれ、町に村に遣わされた、あの七十人の弟子たちでした。

さて、七十人が喜んで帰って来て、こう言った。「主よ。あなたの御名を使うと、悪霊どもでさえ、私たちに服従します。」イエスは言われた。「わたしが見ていると、サタンが、いなずまのように天から落ちました。確かに、わたしは、あなたがたに、蛇やさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を授けたのです。だから、あなたがたに害を加えるものは何一つありません。だがしかし、悪霊どもがあなたがたに服従するからといって、喜んではなりません。ただあなたがたの名が天に書きしるされていることを喜びなさい。」

（ルカの福音書10章17～20節）

イエス様から遣わされた七十人も前に挙げた人々と同じようにイエス様の御名を使って伝道し、悪霊どもを服従させました。にもかかわらず、イエス様の評価はまったく違ったのです。前者はイエス様から「わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け」と叱責され、後者は「あなたがたの名が天に書きしるされていることを喜びなさい」と褒められたのです。この違いはどうして起こったのでしょうか。イエス様は行ないや、その結果によって人を評価される方ではありません。心の中までお見通しになる方です。前者は自分の栄光を現わすためにイエス様の御名を利用し、後者はイ

エス様の御名によってただイエス様のご栄光が現わされたことを喜んだのです。前者は自分を誇り、後者はイエス様を誇ったのです。前者は自分たちの福音活動を高く自己評価し、後者は自分たちが取るに足りない者であることを自覚し、ただイエス様のおっしゃるとおりに行動したのです。そのような彼らにイエス様はサタンに打ち勝つ権威をお授けになり、ご自分の器としてお用いになったのです。

イエス様は主人に仕えるしもべの態度について、たとえをもって次のようにおっしゃっています。

あなたがたのだれかに、耕作か羊飼いをするしもべがいるとして、そのしもべが野らから帰って来たとき、「さあ、さあ、ここに来て、食事をしなさい。」としもべに言うでしょうか。かえって、「私の食事の用意をし、帯を締めて私の食事が済むまで給仕しなさい。あとで、自分の食事をしなさい。」と言わないでしょうか。しもべが言いつけられたことをしたからといって、（主人が）そのしもべに感謝するでしょうか。あなたがたもそのとおりです。自分に言いつけられたことをみな、してしまったら、「私たちは役に立たないしもべです。なすべきことをしただけです。」と言いなさい。

（ルカの福音書17章7～10節）

イエス様は七十人をお遣わしになるとき、
財布も旅行袋も持たず、くつもはかずに行きなさい。

（ルカの福音書10章4節）

とおっしゃいました。旅に必要と思われる物を何一つ持たずに行きなさい、とイエス様はおっしゃったのです。いったい、これはどのようなことを意味するのでありましょうか。それはイエス様が「あなたがたが持っているこの世のもの（その中には持ち物だけではなく、自分の知恵も含まれていますが）には一切頼らないで、ただわたしの言うことにだけ従って行きなさい」という意味であります。自分が取るに足りない者であることをわきまえていた彼らは、主の仰せに忠実に従って自分の物は何一つ持たず、主にのみ拠り頼んで出かけました。その彼らの信仰をよしとされた主は、主に敵するあらゆる力に打ち勝つ権威をお授けになり、また彼らにとって必要なすべてのものもお与えになったのです。そして七十人の弟子たちはただ主のご栄光を拝し、喜びながら自分たちは主が仰せになったことをしただけの相変わらず無力な、取るに足りない者であることを自覚しつつ帰って来たのであります。

今、主が必要とされるキリスト者

今ここで私たちについて考えてみたとき、果たして私たちはこの七十人のように、ほんとうに主のご栄光のみを喜ぶ信者になっているでしょうか。この七十人のように自分に拠り頼むことなく、主のしもべとして主にのみ拠り頼んでいるでしょうか。果たして私たちは自分は愚かであり、無力であり、取るに足りない者であると心の底から思っているでありましょうか。もし私たちの自我が砕かれ、自分は無きに等しい者であると、心から思っているならば、主はその私たちを通りよき管としてお用いになるのであります。

終わりの日の近い今、主は働き人として遣わそうと、用いられる器を求めておられます。そして主が必要とされるのは、自分を誇るキリスト者ではなく、この七十人のような人には名も知られない、しかし主に忠実なキリスト者であります。冒頭のみことばの中でイエス様は七十人を送り出すときに、

わたしがあなたがたを遣わすのは、狼の中に小羊を送り出すようなものです。

（ルカの福音書10章3節）

とおっしゃいました。この主のみことばから私たちはイエス様がどんな思いで祈って彼ら

を送り出されたのか、彼らに対するイエス様の深いご愛の一端をうかがい知ることができます。そして今も終わりの近いこの時に、主は無きに等しい者となったキリスト者を、このように祈って、収穫の日のための働き手として福音を宣べ伝えるためにお遣わしになるのであります。私たちはここで改めて自分を吟味し、主の救いの恵みを、ただいただいて喜んでいるだけではなく、収穫の時、すなわちご再臨の日のために、「実りは多いが働き手は少ない」と働き手を求めておられる主の求めにふさわしい者として、自らを無にして主に従う働き手となることを喜ぶことができたなら、どんなに幸いなことでありましょうか。そのような収穫のための働き手として整えられ、主ご自身が実を結んでくださるための管として用いられるように、私たちは今心から祈りたいと思う次第です。

最後に主のみことばをお読みして終わります。

あなたがたは、「刈り入れ時が来るまでに、まだ四か月ある。」と言ってはいませんか。さあ、わたしの言うことを聞きなさい。目を上げて畑を見なさい。色づいて、刈り入れるばかりになっています。すでに、刈る者は報酬を受け、永遠のいのちに入れられる実を集めています。それは蒔く者と刈る者がともに喜ぶためです。

（ヨハネの福音書4章35～36節）

十二　隠された神の奥義

私たち（イエス・キリストを信じる者）の語るのは、隠された奥義としての神の知恵であって、それは、神が、私たちの栄光のために、世界の始まる前から、あらかじめ定められたものです。この知恵を、この世の支配者たちは、だれひとりとして悟りませんでした。もし悟っていたら、栄光の主（イエス・キリスト）を十字架につけはしなかったでしょう。まさしく、聖書に書いてあるとおりです。「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。」神はこれを、御霊（神の霊）によって私たちに啓示されたのです。御霊はすべてのことを探り、神の深みにまで及ばれるからです。

（コリント人への手紙第一　2章7～10節）

今日はこのみことばから隠された神の奥義について、ごいっしょに考えたいと思いま

す。聖書は神のことばであると言われます。それは、創造主にして全知全能の生ける神様がご自分のお考え、ご計画、ご意志を、自らお選びになった人々の手を通して私たち人間に語ってくださっているからです。しかし、「聖書を読んでも何のことか意味が理解できないところがある」ということを聞きますが、それはどうしてでしょうか。それは私たちが神のことばである聖書を、人間の考えや経験によって書いた書物と同じように人間の知恵や知識で理解しようとするからであります。冒頭のみことばに書かれておりますとおり、聖書に記されている神様のお考えは、人間の経験や知恵ではとうてい計り知ることはできず、神様の御霊の啓示を受けてはじめてわかるのであります。

そこで、これから聖書に記されている数々の隠された神様の奥義について、御霊のお導きに従ってごいっしょに見てまいりたいと思います。

隠された神の奥義：救う者はあらかじめ定められていた

まず、隠された神の奥義は、神様がイエス様を信じる者をご自分の子として、天の御国を相続するようにと、はるか昔からあらかじめ定めておられたという驚くべき奥義であります。これについてパウロはエペソの教会の信者に宛てた手紙で次のように言っています。

神は私たち（イエス様を信じる者）を世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。神は、ただみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられたのです。それは、神がその愛する方（御子イエス様）によって私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです。私たちは、この御子のうちにあって、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです。これは神の豊かな恵みによることです。神はこの恵みを私たちの上にあふれさせ、あらゆる知恵と思慮深さをもって、みこころの奥義を私たちに知らせてくださいました。それは、神が御子においてあらかじめお立てになったご計画によることであって、時がついに満ちて、この時のためのみこころが実行に移され、天にあるものも地にあるものも、いっさいのものが、キリストにあって一つに集められることなのです。このキリストにあって、私たちは彼にあって御国を受け継ぐ者ともなったのです。私たちは、みこころによりご計画のままをみな実現される方の目的に従って、このようにあらかじめ定められていたのです。

（エペソ人への手紙1章4～11節）

「私たちが神様のみこころによって、神様の壮大な救いのご計画の対象として生まれるはるか前から選ばれていた」ということは何という驚きでありましょうか。神の御子イエス様もご自分の弟子とする者を一人ひとりご自分でお選びになりましたが、そのとき次のようにおっしゃいました。

あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。

（ヨハネの福音書15章16節）

弟子として選ばれた漁師のペテロやヨハネは、初めて会ったイエス様がどなたかも知りませんでした。またパウロはイエス様に敵対してイエス様を信じる者を迫害していました。そのような者たちをイエス様はお選びになって弟子とされたのであります。私たちも同様ではないでしょうか。私たちは自分から先にイエス様に目を止めて、主として選んだのでしょうか。そうでないことは自分自身がよく知っています。では神様はどうして私たちを救いの対象に選んでくださったのでしょうか。それはただ神様の一方的なあわれみによるのです。パウロはローマの信者に宛てた手紙の中で、

神はモーセに、「わたしは自分のあわれむ者をあわれみ、自分のいつくしむ者を

いつくしむ。」と言われました。したがって、事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。

（ローマ人への手紙9章15～16節）

と言っているとおりであります。私たちは改めて、自分のような罪深い愚かな者をあわれみ、生まれるはるか前から救いの対象として選び、イエス様を信じる者として天の御国を受け継ぐようにしてくださった神様の深い、深い、救いの奥義を御霊の啓示によって知ることができたことを心から感謝したいと思います。

隠された神の奥義・イエス・キリストご自身

また隠された神の奥義は、神の御子イエス・キリストご自身であります。これについてパウロは弟子のテモテに宛てた手紙で次のように言っています。

確かに偉大なのはこの敬虔の奥義です。「キリストは肉において現われ（人間とおなじからだを持つ人として地上に来られ）、霊において義と宣言され（その霊は汚れなく、聖く正しいと証しされ）、御使いたちに見られ（仕えられ）、諸国民の間に宣べ伝えられ、世界中で信じられ、栄光のうちに（天に）上げられた。」

（テモテへの手紙第一　3章16節）

神様のひとり子の神であるイエス様が、すべての人間が犯した神様に対する背きの罪を一身に負う目的で、尊いいのちを捨ててくださるために、卑しい、罪深い私たち人間と同じ血と肉のからだをお持ちになってこの世においでになったということは、私たち人間の知恵や知識による理解をはるかに越えた神様の驚くべき救いのご計画の奥義であります。

この尊い目的を成し遂げるために罪のないイエス様は捕えられ、人々の恥ずかしめを受け、ののしられ、十字架の上で私たちの罪を身代わりに負って死んでくださったのです。これについてペテロは初代教会の信者に宛てた手紙に次のように書いています。

キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方（父なる神）にお任せになりました。そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために（神様に従って）生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、（罪を）いやされたのです。

（ペテロの手紙第一　2章22～24節）

私たちが自分ではどんなに努力をしても取り除くことのできない染み付いた罪を贖ってくださるために、イエス様はどんなにひどい恥ずかしめをお受けになったか、どんなに大きな苦しみを味わわれたかを思うときに、私たちはイエス様の前にひれ伏してただ、ただ感謝するばかりであります。

隠された神の奥義・御霊の内在

また隠された神の奥義は、イエス様を信じるすべての者の中にイエス様の御霊が住んでくださるということであります。パウロはコロサイの信者に宛てた手紙で、

これは、多くの世代にわたって隠されていて、いま神の聖徒たちに現わされた奥義なのです。神は聖徒たちに、この奥義が異邦人の間にあってどのように栄光に富んだものであるかを、知らせたいと思われたのです。この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです。

（コロサイ人への手紙1章26～27節）

と言っています。復活されて天に戻られたイエス様は、今度は見えないイエス様である御霊として、信じる者すべての心に住んでくださり、内側からキリスト者を助け、支え、導

いてくださいます。ですから、キリスト者はたとえ苦難や試練に会うことがあっても、またどこにいても、いつもともにいてくださるイエス様におゆだねし、イエス様に心から信頼していれば何の不安も恐れもありません。

あなたが水の中を過ぎるときも、わたしはあなたとともにおり、川を渡るときも、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。

（イザヤ書43章2節）

と約束してくださるからです。このようにイエス様が信じる者の中に住んでくださることほど私たちキリスト者にとって心強いことはないのであります。しかし、そのためにはパウロがガラテヤの信者に宛てた手紙で、

私（の古い人）はキリストとともに十字架につけられました。もはや（古い）私が（罪の支配の下に）生きているのではなく、キリストが（新しく生まれ変わった）私のうちに生きて（支配して）おられるのです。

（ガラテヤ人への手紙2章20節）

と言っているように、自分を明け渡しイエス様のご支配にゆだねて生きる自覚が必要であ

ります。

隠された神の奥義・信じる者のからだのよみがえり

また隠された神の奥義は、イエス様を信じる者に永遠のいのちと終わりの日にからだのよみがえりが与えられるということであります。イエス様はかつてマルタに、

わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがありません。このことを信じますか。

（ヨハネの福音書11章25節）

とおっしゃいました。そしてこの約束をご自分の復活によって私たち信じる者に証明してくださったのです。パウロはイエス様の復活についてコリントの教会の信者に宛てた手紙で、

もしキリストがよみがえらなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお、自分の罪の中にいるのです。そうだったら、キリストにあって眠った者たち（イエス様を信じて死んだ者）は、滅んでしまったのです。もし、私

たちが（からだのよみがえりの希望がなく）この世にあってキリストに単なる希望を置いているだけなら、私たちは、すべての人の中で一番哀れな者です。しかし、今やキリストは、眠った者の初穂（死んだすべてのキリスト者の代表）として死者の中からよみがえられました。

（コリント人への手紙第一15章17～20節）

とイエス様の復活の大きな意義を説き明かしています。そして、キリスト者の肉体のよみがえりについてコリント人への手紙で次のように言っています。

聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみなが眠って（死んで）しまうのではなく、みな変えられるのです。（ご再臨の合図の）終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者（すでに主を信じて死んだ者）は朽ちないもの（からだ）によみがえり、（その時生きている）私たちは（みな朽ちないからだに）変えられるのです。

（コリント人への手紙第一15章51～52節）

さらにキリスト者のからだのよみがえりについて、パウロはもっと詳しくテサロニケの信者に宛てた手紙に書いています。

主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

（テサロニケ人への手紙第一　4章16～17節）

からだのよみがえりの希望が確かなものであることを御霊によって確信できる私たちは世にも幸せな者ではないでしょうか。

隠された神の奥義・ユダヤ人と異邦人は御国の共同相続人

また隠された神の奥義は、神様に最初に選ばれた民であるユダヤ人と私たちのようなユダヤ人以外の異邦人が、やがてイエス様によって一つとされ、ともに天の御国の相続人とされるということであります。パウロはこれについてエペソの教会の信者に宛てた手紙で次のように書いています。

先に簡単に書いたとおり、この奥義は、啓示によって私に知らされたのです。そ

れを読めば、私がキリストの奥義をどう理解しているかがよくわかるはずです。この奥義は、今は、御霊によって、キリストの聖なる使徒たちと預言者たちに啓示されていますが、前の時代には、今と同じようには人々に知らされていませんでした。その奥義とは、福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人もまた共同の（神の御国の）相続者となり、ともに一つのからだに連なり、ともに（天の御国の）約束にあずかる者となるということです。

（エペソ人への手紙3章3～6節）

ここに「先に簡単に書いたとおり」とあるのは、同じ手紙の二章一一～一九節に書かれていることであります。すなわち、

あなたがたは、以前は肉において異邦人でした。すなわち、肉において人の手による、いわゆる割礼を持つ人々（ユダヤ人）からは、無割礼の人々と呼ばれる者であって、そのころのあなたがたは、キリストから離れ、イスラエルの国から除外され、約束の契約については他国人であり、この世にあって望みもなく、神もない人たちでした。しかし、以前は遠く離れていたあなたがたも、今ではキリスト・イエスの中にあることにより、キリストの血によって近い者とされたのです。……（18

節～）私たちは、このキリストによって、両者ともに一つの御霊において、父（父なる神）のみもとに近づくことができるのです。こういうわけで、あなたがたは、もはや他国人でも寄留者でもなく、今は聖徒たちと同じ国民であり、神の家族なのです。

（エペソ人への手紙2章11～19節）

とあるとおりであります。しかし、神様から遣わされた御子イエス様を今もって救い主と認めず、いまだにユダヤ教を信じているユダヤ人は果たして救われるのかと思っておられる方も少なくないと思います。これについてパウロはローマの信者に宛てた手紙で次のように説き明かししています。

兄弟たち。私はあなたがたに、ぜひこの奥義を知っていていただきたい。それは、あなたがたが自分で自分を賢いと思うことがないようにするためです。その奥義とは、（選びの民である）イスラエル人の一部がかたくなになったのは異邦人の（救いの）完成のなる時までであり、こうして、イスラエルはみな救われる、ということです。こう書かれているとおりです。「救う者（贖い主キリスト）がシオン（天における神の都）から出て、ヤコブ（イスラエルの民）から不敬虔を取り払う。こ

れこそ、彼らに与えたわたし（主なる神）の契約である。それは、わたしが彼らの罪を取り除く時である。」彼らは、（キリストの）福音によれば、あなたがた（異邦人）のゆえに、神に敵対している者ですが、選びによれば、（イスラエル人の）先祖たちのゆえに、愛されている者なのです。神の賜物と召命とは変わることがありません。ちょうどあなたがたが、かつては神に不従順であったが、今は、彼らの不従順のゆえに、あわれみを受けているのと同様に、彼らも、今は不従順になっていますが、それは、あなたがたの受けた（神の）あわれみによって、今や、彼ら自身もあわれみを受けるためなのです。なぜなら、神は、（ユダヤ人も異邦人も）すべての人をあわれもうとして、すべての人を不従順のうちに閉じ込められたからです。ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いことでしょう。そのさばきは、何と知り尽くしがたく、その道は、何と測り知りがたいことでしょう。

（ローマ人への手紙11章25～33節）

パウロが感嘆しているように、何と神様の救いの奥義は奥深いことでありましょうか。

隠された神の奥義・世の終わりに救いのご計画が成就する

また隠された神の奥義は世の終わりの時に神の救いのご計画が成就するということであります。ヨハネの黙示録は次のように記しています。

第七の御使いが吹き鳴らそうとしているラッパの音が響くその日には、神の奥義は、神がご自身のしもべである預言者たちに告げられたとおりに成就する。

（ヨハネの黙示録10章7節）

第七の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、天に大きな声々が起こって言った。「この世の国は私たちの主およびそのキリストのものとなった。主は永遠に支配される。」

（ヨハネの黙示録11章15節）

第七の御使いの吹き鳴らすラッパは神様に逆らう者をイエス様が滅ぼされて、神様のさばきが終わったことを表わす合図です。そしてその日に神様の救いのご計画はすべて成就するのであります。パウロはこれについてコリントの信者に宛てた手紙に、

それから終わりが来ます。そのとき、キリストはあらゆる支配と、あらゆる権威、

権力を滅ぼし、国を父なる神にお渡しになります。キリストの支配は、すべての敵をその足の下に置くまで、と定められているからです。最後の敵である死も滅ぼされます。「彼（キリスト）は万物をその足の下に従わせた。」からです。……（28節）しかし、万物が御子に従うとき御子自身も、ご自分に万物を従わせた方（父なる神）に従われます。これは、神が、すべてにおいてすべてとなられるためです。

（コリント人への手紙第一15章24～28節）

と書いています。

そして最終的な神様のご計画が実現します。神様の啓示によって新しい天と地、および新しい天の都エルサレムを見る恵みを与えられたヨハネは、御霊に導かれて次のように黙示録に書き記しました。

私は、新しい天と新しい地とを見た。以前の天と、以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。そのとき私は、（天の）御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼ら（イエス様を信じる人々）とともに住み、彼らはその民となる。

また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」すると、御座に着いておられる方が言われた。「見よ。わたしは、すべてを新しくする。」また言われた。「書きしるせ。これらのことばは、信ずべきものであり、真実である。」

（ヨハネの黙示録21章1～5節）

「これらのことばは信ずべきものであり、真実である」と神様が仰せになった神様の奥義は、はじめの天地創造から新しい天と地に至るまで、とうてい人間の知恵によって知ることはできないということ、しかし、この奥義は主権者なる神様からの啓示をいただいたキリスト者の霊に御霊によって示されてはじめて明らかにされるということを改めて知ることができたこと、そしてまた、私たちのような者が永遠から永遠にわたる神様のご計画の中に置かれており、救いの奥義の中で永遠の昔から神様によって救われるべき者と定められていたこと、またそのご計画は御子イエス様において実現し、霊肉ともにイエス様のご再臨の日に完成させられることを御霊の導きによって知ることができたことを心から感謝いたします。

この世の終わりの近いことを実感をもって感じる今のとき、世の始まる前から主の選びの中にあったという恐れ多い事実を知った私たちは、改めて主のあわれみと恵みとご愛に深く感謝をささげたいと思います。それとともにまだこのような大きな神様の恵みに与かるべく選ばれ、招かれていながら、それを知らずにこの世の混迷の中をさまよっている人々を、ひとりでも多く主のみもとにお連れすることが今の時の私たちキリスト者に与えられた務めであることを深く心に刻んで、残された日を主にあって忠実に歩ませていただけるよう、主の導きを切に祈りたいと思います。そして主のご再臨に備えて御霊の満たしを日々祈り求めながら喜んで主を見上げつつ主に従って歩み、やがて天の御国でともに主をほめたたえたいと心から願う次第であります。

これまでに出版された著者の福音メッセージ集の題名と目次案内

■私たちの国籍は天にあります

わたしのところへ来なさい。休ませてあげます／医者に治せない病気／罪（ＳＩＮ）から神の子（ＳＯＮ）へ／あなたの誇りは何か／ほんとうの自由／天国への招待にふさわしい者／神の標準と人の標準／三つのうめき／主イエスの祈りに支えられる信仰／愛する者との再会

■医者に治せない病気

神のなさるインフォームド・コンセント／癌の告知と罪の告知／安楽死と尊厳死を通して死の問題を考える／臓器移植と永遠のいのちの移植／もう一つの痛み／光を見つめると治る病気／肉の目の色盲と霊の目の色盲／たましいの健康管理／環境破壊は人の力では阻止できない／あばら骨の役割／医者に治せない病気／ハイテク医療の中の生と死…医の倫理を模索する中で…／退任講演「若き日に汝の造り主を覚えよ」

■みことばは食べるもの

聖書はすべて神のみことば／みことばは食べるもの／わたしが造ったたましい／正しい信仰に生きるために／永遠の安全保障／「真理とは何ですか」／主との交わり／主イエスからの心離

れ／信仰による決断／主イエスを信じる者の幸せ

■仮の住まいと永遠の住まい

仮の住まいと永遠の住まい／ストレスからの解放／自分の日を正しく数える／宗教の神と聖書の神／神の奥義としての処女降誕／ふたりはイエスとともにいた／信仰における正しい熱心、間違った熱心／「わたしもあなたがたを遣わします」／信仰の確信／神から受ける慰め…父の友人の手紙から

■私たちはキリストに会った

人として貧しくなられた主イエスの招き／愛すること、赦すこと／イエス様とはどんなすばらしいお方か／「空の鳥、野の百合を見なさい」／「私たちはキリストに会った」／主が悔い改めを急がれる理由／人間の究極的な行く先／「わたしにあるものを上げよう」／キリストはなぜ昇天されたか／「それがあなたと何のかかわりがありますか」

■新しい天地と古い天地

サタンを踏み砕くキリスト／人の望みと神から来る希望／「わたしにつまずかない者は幸いです」／心に書かれた肩書／新しい天地と古い天地／神の選びに与かる者／遺伝子の修復と霊の

修復／オリーブ油のつぼ一つ／報われる忍耐／いのち長き時代に生きるために最も必要なこと

■何を求めて生きるか

何を求めて生きるか／暗やみからの脱出／主は後ろの戸を閉ざされた／ほんとうの満足とは／代価を払って買い取られた者／キリスト者の良き行ないとは／新しい歌を主に歌え／イエスの御名において／無価値な者を顧みられる主／御子を信じる者がひとりとして滅びることなく…あるキリスト者の葬儀でのメッセージ／天の御国目指して歩む旅人／終わりまで歩み、休みに入れ

■著者略歴■

重田　定義

1927年東京で生まれる

1950年慶応義塾大学医学専門部卒業

1967年慶応義塾大学助教授（医学部・衛生学公衆衛生学）

1974年東海大学教授（医学部・衛生学）

現在東海大学名誉教授　医学博士

聖書の福音に関する著書

『私たちの国籍は天にあります』（やさしい聖書の福音メッセージ集）

『医者に治せない病気』

『みことばは食べるもの』（福音メッセージ集）

『仮の住まいと永遠の住まい』（福音メッセージ集）

『私たちはキリストに会った』（福音メッセージ集）

『新しい天地と古い天地』（福音メッセージ集）

『何を求めて生きるか』（福音メッセージ集）

本文中の聖句は、日本聖書刊行会「新改訳聖書」から引用しています。

わたしはあなたの名を呼んだ　定価300円（本体286円＋税）

2002年12月1日　初版発行

著　者　重　田　定　義

発行者　重　田　定　義

〒167-0033　東京都杉並区清水2-8-12

印刷・製本　新　生　宣　教　団

定価300円（本体286円+税）